

とを共に能作因と申します。

二、俱有因 同時にあつて互に持ちつ持たれつして存在するもので、狭く申せば、老人は杖を力にして立ち、杖は老人を力として立つやうに、大観すれば一切萬物は互に持ちつ持たれつして存在して居るので、動物の吐く息を植物が吸ひ、植物の吐く息を動物が吸つて居るやうに、互に俱有の因となるのであります。

三、同類因 人間の子には人間を生じ、猿の子には猿が出来、白に依つて白が生じ、黒に依つて黒が生ずると云ふやうに、同じ種類のものに依つて同じ種類が生ずるのを同類因と申すのであります。

四、相應因 これは心の内のみの事で、一切の心的作用は是れ亦互に聯絡して居るので、一つの作用が起れば、従つて俱に起る所の聯想の作用がありまして、それが又一つの原因となるのであります。

五、遍行因 これも亦心内の作用で、殊に惡に染つて行く方に限り、先の相應因より尙狭いものであります。これらの事は佛教心理の微細に亘らねばならぬのでありますから、こゝには唯さう云ふ原因があると云ふ事に止めて置きます。

六、異熟因 これは善惡の性を有するものが非善非惡の結果を引き起すもので、異熟とは異類を成熟すると云ふ義で、又共に姿をかへて其の結果を生ずる原因となるものをも申しまして、例へば小さな種子から大きな枝や幹を生ずるやうなものであります。

これらの因を助けるのに四縁と云ふものがあります。

一、因縁 これは親しく結果を生ずるところの原因を云ふので、心はすべて其の種子より起るもので、種子が因縁となつて親しく心の働きを生ずるものであります。

二、等無間縁 これは前の念が滅すると共に後の念が起り前滅後生々々々と心の働きが連続して行つて、前念の滅するは後念の生ずる縁となり、前後同等の法が無間に連続するのを等無間縁と云ひます。

三、所縁々々 所縁と云ふのは客觀的對象の事で、眼に見たり耳に聴いたりする此の客觀的對象が心の起る縁となります。心と云ふものは決してひとりてに起るものでなく、必ず對象があつて始めてこゝに能縁の心が起るのでありますから之を所縁々々と申します。

四、増上縁 心や物の存在は單に直接原因たる因縁に依るのみでなく、必ず他に間接原因があつて物や心をして存在せしめるので、よし助けざるも之を妨げないものをも此の中に數へるのであります。

此のやうに因を六つ、縁を四つに分けてゐますが、それはたゞ一應の分類で、更に之を精細に研究して因縁相續の理法を説いて居るのであります。

吉凶禍福のよつて來るところ(三世因果)

一切の事象はこれらの因縁和合の結果として生じ來るもので、我等の現在の運命も亦過去の因縁の果報に外ならないのであります。姑く之と現實を中心として考へて見るのに、今日の地位や此の境遇も、亦其の今日の行動を支配して行くものも、皆な今日以前より繼承し來た過去の結果が積り積つたの外ならないのであると共に今日の行爲が明日以後の結果を招き其の間に因果關係の存する事は何人も否定する事が出來ないのであります。

併し一切の事象が悉く其の因果關係が歴然として居るとは申されません。中にはどう云ふ因縁であるか解き難いものがありますから姑く之を運命と稱して居るので仔細に之を検討すれば、そこに歴然たる因果關係の存して吉凶禍福共に自分の詩いた種子たる事を發見し得るのであります。

而も淺見者流はこんな正直であるのに、何故貧乏するのであらうか、こんな人に人の爲に働いて居るのに、何故病氣になるのであらうか、世には神も佛もないものであるかなど、云ふのでありますが、これは因果關係の錯綜を見誤つて居るので、正直だとか不正直だとか云ふ事は道德上の因果關係で、正直なるが故に人に信ぜられ正直ならざるが故に人に信ぜられないと云ふやうな結果を生ずるのでありますし、貧乏するとか、せぬとか云ふ事は經濟上の因果關係で、どんなに正直でも無駄使ひが多かつたら貧乏するし、不正直でも蓄財に巧みなものには金持になり、或は又どんなに人の爲に働いて居つても衛生を怠れば病氣になると云ふやうな衛生上の因果もあるものでありますから道德上の原因を以て直ちに經濟上の結果を観察したり、又は衛生上の結果を見たりするが如きは、其の見方を誤つて居ると言はなければならぬので、これらを糸を手繰るやうに因果の筋を手繰つて行けば、そこに因果の歴然たる

關係を見得るのであります。

併し乍らそれは頗る複雑で、現在の事に於てさへ見難いのでありますから況して生前の事等を洞察する事は難く、之を運命と諦めてしまふのも一應の道理であります、其の爲に因果關係がないとは言へないのであります。特に因果の關係は、こゝに原因があつて直ちに其の結果を生ずると云ふやうな明らかなものばかりでなく、現在に其の種子を蒔きながら、其の結果は直ちに之を見る事が出来ず、丁度今年蒔いた麥の種子は明年になつて芽を出すやうなものや、或は桃栗三年柿八年と云ふやうに三年も八年も経つてからでなければ其の結果を生じないものもあるのであります。唯一應の觀察で因果關係なしと斷ずるのは大早計であります。

因縁のあらはれ方

佛教では其の結果の發現に就きまして、四つの分類を示して居ります。

一、順現受業 これは現在に行ひました結果を直ちに現在に於て受けて行くので、手近くいへば今酒を飲んで今酔ふと云ふやうなもの、更に之を遠く一生涯に及ぼすと、青年時代の行爲が老年になつて報いられるのであります

二、順次生受業 これは今やつた結果が今現はれずに次に現はれて來るのて、前の例でいへば今酒を飲んで明日になつて二日酔をするると云ふやうな結果を生ずるので、現世で行つた行爲を現世で其の結果を受けずに、次の世に生れた時、その結果を受けるをいふのであります。

三、順後受業 これは現在行つた結果を次の世に受けず、來々世とか其の次の次に受けるとか云ふやうにずつと後に至つて其の結果が現れるので、矢張り手近く前の例で云へば、若い時から大酒を飲んだ結果が或は中年に或は老年になつて中風を起すと云ふやうなものであります。

四、順不定授業 これは現在に原因を行ひましても、其の結果を受くる時が定らないものであります。

此のやうに四つに分類しますが、唯これだけでなく、其の原因が千差萬別なのに従つて其の結果も亦千差萬別であり。善を行つて善の結果があるべき筈であるが、それと共に行つた悪の方が多い場合は善の結果が消えて悪の結果が現はれ、或は悪を行つても善を行つた方が大であると、善の結果が先に現はれて悪の結果が後で現はれると云ふやうに色々錯綜してゐるとするのてあります。

佛教運命論の特色

佛教は我等の運命を以て過去の宿業であるとしませんが、其の過去の宿業たるべき業、即ち身で行ひ、口で言ひ、意で思つた行爲は、我等自身は何の記憶

もないので、どういふ事を行つたか、何人も之を實驗證明する事が出来ない
のであります。然りとすれば之を「不可解なる命運」と云ふのと結局異なる
事がないこととなりませう。佛教ではそれに對し、凡夫の眼では過去の宿業
を觀察する事は出來ないが、もし三世通達の佛には宿命通と云ふ超能力が
あつて、よく過去の命運が洞察せらるゝと申して居りますが、それは佛に於
てのみ見得られる事で、凡夫の眼には映じ來らないものとすれば、我々には
及ばぬことでありますから、矢張り將來の禍福は神の思召によつて左右せら
れると云ふのと何の異なる事もないこととなりませう。

然らば佛教が精細に因果關係を説き、宿世の業因を語る事も、我等には何
の關係なき架空の談に外ならないといふことになりはしないかと疑ふを得
ないのであります。此の疑ひは一應尤もの事で、生前の事は之を證明する事
も出來ず、實驗する事も出來ませんから、さう云ふ事は信ずる事が出來ない

と云へばそれ迄であるといふの外はないやうであります。それで我々は此
の人生に安心して生きて行く事が出來ませうか。

佛教の運命論の價値は寧ろ過去の説明にあると申すよりも現在にあり將來
にあるのであります。何故現在にあり將來にありと云ふかと云へば、之を不
可解なる運命とするから、徒らに卜占や禁厭によつて之を知らうとし、或は福
を求め禍を避けんとするのでありますし、又神の思召であるとするが爲に、
自ら努むる事なく神に祈り求めんとするのであります。佛教は現在を以て自
己が過去に爲せる業の結果であるとすると共に、將來の運命を開いて行くの
も亦自己の力であるといふ當然の歸結を生ずるので、過去のみが自己の行爲
の結果で、現在以後はそれと無關係と云ふのではない。過去の原因が現在の
結果となると共に、現在の行爲は將來の原因となつて行くのであります。因
果經の中に「若し人過去の因を知らんと欲せば現在の果を見よ、若し來世

の果を知らんと欲せば現在の因を見よ」とありますやうに決して運は天に在りとして袖手傍觀、福は神に在りとして無理な祈願を爲さんとするものではないありません。

過去の宿業なりとする所に、現在に於て何故こんな家に生れたか、何故こんな境遇に置かれたかと云ふやうな徒らな煩悶を除いて、そこに安定の心境を開く事が出来ます。又將來の吉凶禍福は現在の自分の行爲に依るとするが爲に、發奮も努力も出来て行くのであり、自己の將來への希望も生じて來るのでありまして、先に申した通り、運は天に在り、之を開くは腕に在りと進み行く事が出来るので、此の點が單に運命であるとか、神の思召であるとか云ふのと頗る趣きを異にして居る所であります。

宿業の轉換

併し茲に一つの問題が起る。それは既に過去の宿業もだし難しとするならば、如何にして將來への轉向が出来るかであるかであり、之を説くに就ては先に言つた阿頼耶識に就て、一應申し述べて置かなければなりません。

佛敎に阿頼耶のみを極致とせず、更に其の根抵に眞如なるものを立て此の阿頼耶識には覺と不覺との義あつて、覺と云ふのは眞如、即ち悟りの方向に作用、不覺と云ふのは無明即ち迷ひの方向に作用で、此の迷ひの方向に不覺によつて我々は様々の業を作つて行くのでありますが、又覺の方向に働きに依つて此の業より轉じて來つた現在の境涯を更改めて行く事が出来るのであります。

其の覺の方向に向ふのは、其の根本たる心性清淨なる眞如の方向に向ふので不覺の方向に向ふのは、此の眞如海上に無明の風が吹いて、こゝに妄心を起し、

此の妄心が又無明に影響して妄境界を生じ、妄境界が又妄心に薰じまして執着心を生ずると云ふやうに迷ひの方に向つてだん／＼進み、終に業を造るに至るとするのであります。

元來我々の心は眞如と云ひ佛性と云ふ本來清淨なるものがありますので、之を本覺といひます。それが今申します通り一念の迷ひから様々に迷ひに迷ふて居るのでありますが、こゝに心機一轉して其の闇黒界に一點の光明を認むるやうになり、「あゝ悪かつた」と氣がつくやうなのは之を始覺と言ひます。其の一點の光明を漸次に擴大して、全體悉く光明ならしめる様になりますれば、本覺の光こゝに明らかとなるので、喩へて申せば、夜路を歩いて恐い／＼と思ふ心から、棒杭を化物でないかと疑ひ、疑うて見ると目鼻があるやうでもある、動いて來るやうでもある、ナニ動くのではないと悟つたのが始覺の最初、凡夫覺と云ふ。併しまだ目鼻があるやうだと思つて居る、こ

れでは迷ひの境界を脱したのではありません。目鼻も何もあるものではないと悟つたのも、矢張り始覺の中に屬する隨分覺といひ、「ナニ化物ぢやない棒杭である」と悟つたのを相似覺と申します。併し尙迷ひのもとである恐い／＼と思ふ心が存在してゐては、本來清淨とは行きませんが、其の恐い／＼と云ふ心の根本をも拭ひ去るものは究竟覺と言ひまして、此の時には本來清淨の心が全面に出まして始覺と本覺とが不二になるので、此の心の轉換が即ち運命を轉換して行く本で、佛敎ではそれについては、第一に自分も佛も同じ性質を持つて居ると云ふ事を自覺するのを土臺と致します。

梵網經に「汝は當成の佛、吾は已成の佛」とある、當成とは當に成るべきの佛、已成とは已に成つた佛であり、釋迦何人ぞ、達磨何人ぞ、彼も人なり、吾も人なり、唯彼は已に成つた佛であり、我等は當に成るべき佛である。此の當に成るべきと、已に成つたとの差は、豊臣秀吉は已に成つた英雄

であり、吾等は當に成るべきの英雄である。岩崎三井は已に成つた金持であり、我等は當に成るべき金持である。此の同一性を徹見すると云ふ事が、聽て發奮努力する動機となるものであります。併し同一性を既に見た以上は、從來の行動の儘で同一になり得べきものではない、其の歷程として先にも申した通り、過去を清算して悔ひ改めると云ふ道徳的の悔恨が必要となるのであります。

懺悔滅罪

更に佛教に於きましては之を宗教的に考へ、我等は此の懺悔に依つて救はれるべきものであると云ふ信仰をすゝめるのであります。それには懺悔と云ふ宗教的方式を示して居ります。

我昔所造諸惡業

皆由無始貪瞋癡

從身口意之所生

一切我今皆懺悔

即ち自分が過去の昔から作つた所の諸々の罪惡は悉く身や口や意の業に依つて生じたので一切今之を懺悔してしまふと云ふのであります。懺悔の懺は梵語の懺摩で、悔は漢語の改悔の義でありますから既往の罪過を悔ひ改めて將來の行ひを戒しむるので、「玉耶經」に「人誰か過ちなからん、過つて之を改むれば善之より大なるは莫し」とありますし、又世間の道徳に於ても、朱子が「善に遷るは正に風の速かなるが如くなるべし、過ちを改むるは雷の猛さが如くなるべし」とも言うて居りますが、唯自分の心で自ら懺悔するのみならず、之を佛の前に於て懺悔するのであります。人の前に於て懺悔するのは飾りもあり詐りもあつて至心懺悔と云ふ事はなか／＼困難であります。が、佛の前に懺悔する事に依つて、始めて根本懺悔が出来るのであります。根本懺悔とは何であるか、即ち罪惡の根本を引き抜いて全く新たなる生涯に

入る事でありませう。

慧可大師に對して僧璨が「和尚我が爲に罪を懺し給へ」慧可謂ふ「罪を將ち來れ、汝が爲に懺せん」と。そこで僧璨は暫く考へて居りましたが、「罪を覺ひるに不可得なり」と申しますと、慧可は「我汝の爲に罪を懺し竟る」と言ひ、どこにも罪はない、それが根本の懺悔に至るのでありまして、此の點は更に精密なる考察を要すべきではありませんか、それは姑く専門の上の話に譲つて置いて、我等はこゝに「大集經」の語を擧げ、過去の罪惡の懺悔によつて將來の運命を開き得る道が佛教に於て説かれて居ると言ふ事を申すに止めて置させよう、

即ち大集經には

百年の汚衣も一日に於て洗ひ淨めらるゝ如く、百千劫の諸々の不善の業も佛法の力を以ての故によく願ひて懺悔すれば一日一時に於て悉く消滅す。

と説かれて居り、佛教に於て此の懺悔を見る事は頗る重いのであります。我等は此の懺悔によつて心の更改を計り、以て運命の開拓へと進み行く事が出来るのであります。

七、運命の開拓

運命は變はる

以上、いろ／＼な方面から觀察し來つて、此の我なるものが、時間的には父祖の遺傳や、過去の宿業、さては又此の世に生れてから今日まで爲し來つた行爲の結果に縛られ、空間的には我が身邊の家庭より、社會や國家、さては天地自然の影響まで受けて、十重二十重に運命にとりかこまれ、それに左右されて居るのを知ると共に、又此の我に、運命を左右する力のある事をも認めて來ました。

運は天に在りと雖も之を開くは人にあり、運命は我をよく左右しますが、我等には又運命を左右するの可能性が伏在するのであります。此の伏在する

所の力を奮ひ起すと否とが運命を開くや否やの分るゝ所でありのまゝの安らかさに生きるか、活力を出だすか、安らかさに生きるものは運命に翻弄されて何事も爲し得ず、たゞ活力を出だす事によつて運命は開拓せられるのであります。

貧困の一原因

何事も運だ／＼というて、其の翻弄に任せて失敗に陥つたところの原因等を調べますと、成程其の人の先天的素質や、後天的な家庭や社會の事情が原因して居る事は否定する事が出来ませんが、其の人自身に何らの缺陷がなかつたとはいひ得ないのであります。試みに自由労働者になつて居る人々に對して、其の原因を調べて見ますと、大體二つあつて、一つは積極的原因であります。自ら進んで自由労働者の社會に這入つた者と、消極的原因に依つて

他動的に這入つた者とか東京市社會局の調査に於ても示されて居るので其の他動的なる者は多くは社會の變遷に依るものでありますが、自ら進んで入る者の中にも無意識的に父祖の仕事であり、兄弟の仕事であると云ふ所から自然に此の職業に従事したのもありますが、意識的に何らか他の目的を持つて一時的に此の自由労働を手段として或は苦學し、或は貯金しやうとして居るものもあります。併し酒色に耽り遊惰に流れた結果、規則的な職業を避けて自由放縱な労働に従事せんがためと云ふやうな不眞面目なものもあり、或は周圍の誘惑に依つて此の社會に入つて居るものもありますので、必ずしも他動的の原因許りとはいひ得ないのであります。

更にそれらの人々の心理状態を見ますと、一般に貯蓄心に缺乏して居つて、宵越しの金を持たぬ事を誇ると云ふやうな思想を持つて居り、投機心が盛んであつて、移り氣な者が多いと云ふやうな事も觀察せられるのであります。

更に失業の原因等を調べて見ますと、是れ亦移り氣、怠惰、不規律其の他の心理的缺陷を擧げる事が出来るのであります。これらに依りまして兎に角外界の事情の外に、自己の責任と云ふものをも見逃す事が出来ないのであります。

然らば如何にすれば運命が開拓出来るか、これが新たに考へられなければならぬ事であるのであります。

開拓の第一歩

然らば如何にして運命が開拓出来るかと云ふならば、それは舊生活の清算と云ふ事が必要なのであります。在來の生活其の儘にして何らの後悔する事なくして運命が改まつて行くと云ふ事は言はれないので、それには舊生活に

對する反省であります。其の缺陷を填補ひ、其の美點を發揚する事を考へなければならぬのであります。此の反省なくしては所謂更生をして行く事は出來ないのであります。此の舊生活に對する反省こそ應て新生活を開く的第一步で、古來失敗は成功の母であると言はれるのも其の通りであります。唯現在生活に甘んじて其の儘成功を期し得るものではないのであります。菜根譚の中に

「逆境の中に居れば固身皆鍼砭藥石、節を砥ぎ行を礪いて覺えず、順境の内に處れば滿前悉く兵刃戈矛、膏を銷し骨を靡して知らず。」

とありまして、逆境に居る折は自分の周囲の者は皆自分の病氣を治す、鍼は金で拵へた針で砭は石で拵へた針で、藥はくすり、石は溫石のやうなものでありますから、共に自己の周囲のものは我節を砥ぎ行ひを礪くの醫業となるものであります。順境の時には自分の眼の前のもは盡く我身を刺す

の兵器となるやうなものであると言はれて居るので、人間逆境に於て發奮する心も起りますが、順境の内に居るとそれに安んじてしまつて何の反省もせぬもので、人間が痛切に自己を反省するのは却つて逆境の時に多いのであります。逆境の時の反省は憂鬱に流れて自らこれが自己を勵ます醫藥である事を忘れます。順境の時は何らの反省をしません、反省の必要なのは寧ろ順境の時である、希望の心を持たしむべきは逆境の時であります。逆境に失望せず、順境に満足せず、一歩々々進んで行つて始めて運命の向上は圖られるので、劈頭に擧げました袁了凡の例にいたしましても、従前は何等の反省もなく、與へられたる運命のまゝに行動して居りましたから孔生の見た運命の外一步も出づる事が出來なかつたので、雲谷禪師に「汝二十年来命數に縛せられたんぬ」と喝破せられ、禍福門無し、唯自ら招く所であると諭されて、豁然として従來の操行を改めて、十一の目を立て、日々

其の效過を量つて、行爲の更改を圖り、以て其の運今を開いたのであります。行爲の更改は心の更改から出るもので、此の心の更改は自己反省が最も重要なものである事は今まで屢々言うた所でありましたが、今こゝに衰了凡が自ら省みて其の効を過を檢べた效過格十一目を擧げて見ますと、

- 一、孝順
- 二、和睦
- 三、慈敬
- 四、寛下
- 五、勸化
- 六、救濟
- 七、交財
- 八、奢儉
- 九、正行
- 十、敬神
- 十一、存心

であります。フランクリンにも又これに似た十三の科目があつて日々反省の資に供したと云ふ事です。即ち

- 一、攝生
- 二、沈黙
- 三、規律
- 四、決行
- 五、節儉
- 六、勤勉
- 七、正直
- 八、正義
- 九、中和
- 十、清潔
- 十一、靜逸
- 十二、節操
- 十三、謙遜

であります。これらの更改は、先づ現在の自己を知ることから出發します。

迷はず自力で進め

今までしばしば繰返しましたやうに、人の世に處するは足て歩むやうに、一足一脚を固く大地に止めると共に他の一脚を出し、出しては止め、止めては出しつゝ、一歩々々進むべきであると申しましたが、一脚は必ず地に着けると云ふ事は過去より積集つて來た現在の我を知る事でありませう。此の我を知り、其の周囲の他を知り、其の行動の時を知り、所を知るといふことが運命開拓の基準であります。されば此の我自らを知らんとして生年月日に依つて自己の運命を判断しやうとしたり、又人相や或は相生相剋を考へたり、時を知らうとして日の吉凶を言ふたり、所を知らうとして家相や方位を説くに至つたのであります。これらの説の根據の無い事は既に申しました。我等は新

たなる方法で自他時所を知りこゝに立脚して進んで行かなければなりません。一脚は既に地に立ちましても、他の一脚を踏み出す事をしなければ運命は開けるものでありませんから、之を踏み出す力を自己に養ふと云ふ事が必要であります。これがなか／＼養ひ難いものでありますから、徒らに神に祈り佛に頼り、爲に色々な迷信を生ずるに至つたのですが、所詮他に依つて立つものは他に依つて倒るで、自己の奮勵努力に俟つの外に開運の法はないのであります。然らば如何に止まり如何に進むべきか、それには先づ反面より如何なるものが運命を閉塞さうとして居るかを見なければならぬのであります。

運命を閉塞するもの

運命を閉塞するものは何か、それを考へる上に於て最も適切なものは貧困

原因調査であります。東京市社会局が總世帯數五千九百六十一に就て貧困の原因を調べましたものに依りますと、

- 一、財界不況に起因する収入減に依るもの
- 二、事業閉縮により失業し、収入減に依るもの
- 三、生産能力者の疾病負傷等により収入減じ支出増加せるもの
- 四、生産能力者少く不生産者多き爲收支均衡を得ざるもの
- 五、不具、廢疾、疾病、傷痍者を有し收支の均衡を得ざるもの
- 六、住宅費全収入に對し過重と認めらるゝもの
- 七、生産能力者なきもの
- 八、生産能力の缺陷せるもの
- 九、夫の死亡が其の主原因をなすもの
- 十、時代に置き去られたる職業によるもの

- 一、大資本組織に壓迫せられ滅び行く小賣業者
 - 二、夫の離別、失踪等によるもの
 - 三、夫の發狂によるもの
 - 四、長男の死亡が其の主なる原因をなすもの
 - 五、家族相次ぎて死亡せるによるもの
 - 六、天災地變が主なる原因をなすもの
 - 七、生産能力者が入營したる事が原因となりたるもの
- 等を擧げ、以上十七種の原因並に其の複合に依る原因を分類して、其の最も多いのは一によるもので千六百二十三世帯、これは最も平凡であるが、世相を代表して社會的影響の如何に大なるかを示して居ると言へる。其の他のものは大體に於て疾病、死亡が其の原因となつて、働き人を失つたと云ふやうな事で、生計の收支がつくなはなくなつたと云ふ事を見ることが出來ます。

更に同社會局が所謂カード階級に就きまして貧困の原因を個人的に調べて見ましたものでは、不具、疾病、老衰、無力、怠惰、技術無能、拙劣、放蕩、飲酒、賭博等を擧げて居ります。其の社會的なるものは姑く別と致しまして、個人的に之を見ますと、身體の不健康、家計の不均衡、而うして又精神力の惰弱を考へる事が出來るのであります。これらを更改して行く上に於て我々が考へなければならぬ事には、三つの養生法があります。

生活更改の三法

一、身體の健全

古人は三養生といふことを説きまして身の養生、身代の養生、心の養生、此の三つは互に輪の如くになつて、身體が悪くなれば働さが出來ないから身代が悪くなり、身代が悪くなれば心配するから心が悪くなる、心が悪くなれば

ば身體に影響して身が悪くなる、身が悪くなると働けないから身代が悪くなる。身代が悪くなるから又心勞を來すと云ふやうに、互に關聯して居るのであると申して居ります。此三養生に直に開運の要件、我等に先づ其の第一は身の養生、即ち身體の健全を保つと云ふ事から、話さねばなりません。如何に志があつても、身體が虚弱では之を身に行ふ事が出來ず、徒らに煩悶懊惱するの外はないのでありますから、人間運命開拓の第一は此の身體を健全に保つと云ふ事でありましてロングフェローの詩の中にも「健康を伴はざる生活は重荷である、されど健康を伴うた生活は愉快である」と申して居ります。何事をするのにも身體が資本で、此の身體が虚弱であつたり又は疾病に冒されて居るやうでは、如何なる事をも成し得ないのであります。我等の身體は丁度機械のやうなもので、二百個の骨格は個々其の用を異にして圓滿に調和せられ、五百の筋肉と數數の血管とは之を滋養し、無數の神經は之を齊

整し、其の血管の中心となる心臓は刻々に鼓動を怠らず、二百萬以上の汗腺は體温を整へて皮膚内外の交通を掌り、伸ばば數里に亘るべき動脈、靜脈毛細管があります、血球と稱する小有機體は無數の殆ど算すべからざる程の多數に達して、僅かに一つの眼球に就て見ましても、水晶體があり、水漾液があり、硝子漾液があり、各々精巧を極めて居る、其の硬膜、脈絡膜の微妙なる働きは如何なる精巧な機械と雖も之に過ぎたるはないと云ふ程のものであります。若し夫れ其の活動の源泉たる腦を見ますならば、灰白質の細胞は其の數六億を下らぬとされ、其の各々の細胞が皆各々數千の分子を有し、其の分子は又數千百萬の原子より成つて居ると云ふのでありまして、粗雜な一個の時計でも少しく注意を怠れば直ちに其の廻轉を止めるのであります。況んや此の精巧なる身體は少しの不注意でも健康を害するものである事を痛感して居らなければならぬのであります。

衛生や醫學のことは、全く私の専門外に属するのですが支那の最も古い醫書である「素問」と云ふ本に、
「飲食節あり、起居常あり、妄に作勞せず、精神内に守らば、病安んぞ從ひ來らん」

と云ひ、又孔子家語には、

「人三死あり、而も其の命にあらず、己れ自ら取るなり、夫れ寢所時ならず、飲食節あらず、過勞度を過すものは疾苦之を殺す」

といふて居ります。佛教の中にも醫經なるものがありまして、病の十因と

- 一、久坐（運動不足）
- 二、不臥（睡眠不足）
- 三、食不量（食物の過不足）

- 四、憂
 - 五、愁
 - 六、疲極（過度の運動）
 - 七、淫佚
 - 八、瞋恚
 - 九、忍大小便
 - 十、制上下風
- を擧げて居ります。

これ等の諸點に注意して常に其の健康を保たなければならぬのであります。昔盤珪禪師は常に衛生を重んじて、衡を以て飲を量つて飲食頗る慎み、晩年に至つても廢せられなかつた、そこで或る僧が「老師も耄碌せられて餘命を貪つて何となさる」と云ふと、禪師は「生きて人に益なきものは夭折す

るも惜しむに足らぬが、生きて益あるものは一日生きたれば一日世に利あり、余が生を貪る事俗よりも甚しきはこれが爲である」と言はれた、君子一日生くれば一日世に利ありて、此身體の健全こそ運命開拓の主要因たることは申すまでもありません。

二、生計の安定

如何に健康は幸福であるといひましても、貧窮に迫られては何の幸福もないので、人が此の世に立つて行く上に於て、先づ自己の生計の安定と云ふ事を考えて行かなければならぬ、一たび之を失ふ時、困苦忽ち襲ひ來つて其の運命は全く閉塞してしまふのであります。

生計の安定は先づ其の獨立より出發せざるを得ません、此の獨立を圖るの道は最も云ひ古されたることであります、勤と儉の唯だ二つしかないもので、語を換へていへば勤とは時間能力を有効に發揮して行く事であり、儉とは金

錢能率を有効に發揮して行く事で、無駄に時間を使はず之を有効に使はんとすれば自然、勤勉となり、無駄に金錢を使はずして之を有効に使用すべく貯ふる時、自から節儉となるので、生計の不安を補ふの道は勤によつて生産を増加するか、儉によつて消費を節約するかの外はないので私は常に此の道を説くに分數の例を以てしたことがある。例へばこゝに四分の一と云ふ分數がある、此の數の價值を増すには、分母を減ずるか、分子を増すかの二つである、即ち分母を減じて四分の一より三分の一、三分の一より二分の一とすれば其の價值が増し、又分子の方を増して四分の一より四分の二、四分の二より四分の三とすれば其の價值が増して行く。即ち現在の生活より消費を節約して行くのは分母を減じて行く儉の方である、分子を増して行くのは生産の増加を計る勤の方である。此の勤と儉とに依つて自己の生活を保つて徒らに他に依頼する借金を脱離するといふことが必要であります。借金は人生の重

荷で古來これが爲めに自己の運命を閉塞せしめたものは少くないのであります。

勿論、金銭は融通物であるから之を有効に使用する場合、他より借り入れるといふ事も亦必要であります。自ら生活に反省する所なく他よりの借金によつてこれを維持せんとする如きは決して開運の方途ではないのであります。かく言へば「人間には不時の事がある、これに處するには借金の外はない」と抗辯するものがあるかも知れないが、「それ程、不時の事のあることが判つて居れば何故常に貯金しないか」と云ふ反問が放たれる、これに對して又「貯へもない、有り餘つて居れば貯金も出来るが、有り餘つて居らないから貯金は出来ない」といふ、しかし有り餘つて居れば貯金しなくても残つて居るからよいので、有り餘らぬ中から節約をしてこそ眞の貯金は出来て行くので、古人も人間の身體は濡手拭の如く一見水がないやうであるが堅く搾れば

ポロ／＼と水が落ちるやうに、我等の生活も一見、之れ以上節約の方が無いやうです。仔細に點檢すれば、そこに省くべきものを發見し難きではないと云ふて居ります、通り心掛一つで生活の安定は得られますので、此の勤に反對するのは怠惰であり、不規律であり、放縱であり、遊蕩でありまして、儉に反對するのは浪費であり、贅澤であり無勘定でありまして、其の根本は心の獨立を得ず外界の誘惑に打ち克つことが出来ず、自己の内心の慾望を制馭する事が出来ぬからで、それには心の養生といふことが必要であります。

三、精神の修養

心の養生は即ち精神の修養を計ることであつて、これには知識を啓發して心の糧を與へて其の營養を計ると云ふ事が其の一つで、見聞學識皆な採つて以て心の糧たらざるものはないが、殊に古人や先輩の知識の集積せられたる書を読むと云ふ事程、心の糧を得るに必要なものはない。宋の眞宗皇帝の

勸學文に

「家を富さず良田を買ふことを用ひず、書中、自ら千鍾の粟あり、居を安んずるに高堂を架するを用ひず、書中、自ら黄金の屋あり、明を出るに人の随ふなさを恨みず、書中、車馬多くして簇がるが如し、妻を娶るに良媒なさを恨むなかれ、書中、自ら女なり、顔、玉の如し」

といひ、ジョンハーシエルが

「若し如何なる場合にありても、余の周邊を離れず、一生の間、愉快と幸福との源泉なり、如何なる悲惨に遭遇するも、猶ほ其の不幸を避け、以て我が愁眉を開かしむるものは讀書なり」

と云ふてあるやうに、凡そ世の中に讀書程、我等に心の糧を與へるものはない。併し唯單に書を讀むと云ふ事だけでは精神の糧にはならぬ、能く之を咀嚼して自己のものにするのでなかつたらば、假令萬卷の書を讀むとも、遂に

何の効無きに終るのであるから、其の爲には讀書によつて得て來た知識を靜かに慮ひ、之を統一整理すると云ふ事が必要で、此の靜思、熟慮して其の心の糧を咀嚼して行くといふことが必要であります。つまり靜思熟慮によつて自己の常識を涵養ひ、意志を鍛鍊して行くばかりでなく、文情趣を豊にして世に處し人に接する基礎たる眞の自己を發見し、自ら其の慾望を制馭し、他に惑はされざる根本精神を養ひ得られますので、此の心の修養こそ運命開拓の策源地であるといつても差支はないのであります。此の事に於ては向後後に申上げねばなりませんから、心の富として佛敎に説かれた七つの聖財を列舉して一考に供するに止めて置きます。七聖財とは、

一、信 心に篤く信ずる所がある人は成功し、信ずる心がなく、あやふ

やで、常に疑つて事に當れば、事に迫力がなくして破れることが少くない、信仰は心の大きな力であります。

- 二、進 此は詳しくは所謂精進で、進取の氣風なく常に退嬰の方途を取るときは其處に運命開拓の戸は閉ざされるのである。
- 三、戒 戒は規律である。自己の生活に規律なく、自己の行爲に規律を缺く、所謂ツボラ、放逸なる生活は斷じて運命を開く道ではない。
- 四、慙 自ら自己に反省して愧づる心のないものは決して心の更改の出来るものではない。恥しいと云ふ心は是れ發奮の動機である。
- 五、聞 吾等の知識の増進や行爲の是正は他に聞く事に依つて學び得るのであつて、人の説を聴く事を拒むものは發展の餘地なし。
- 六、捨 總ての事に執着なく常に公平の心を以て、憎無く、愛無く、以て事に従ふ、此の心懸て運命開拓へ進むべきの道である。
- 七、定慧 定は心を決して散ぜしめず、諸々の妄念を止めて行き、慧は即ち智慧の働きて、其の運命開拓に必要な事は先にも説いた通りであります。

此の七つは我等が心の糧を得るに最も必要なものであると思ひますから、こゝに之を擧げて置きます。

ります。

八、運を開く心構へ（開運の心力）

先づ己と他を知れ

我々は自己の脚下を踏み固むるために、自ら知り、他を知り、時を知り、所を知るの必要は既にいひましたが、實際は自ら自己の體質や自己の性格、自己の素養を知らずして無謀な計画を立て、行ひ難き事業を企てましても成功すべきものではないのであります。身體の虚弱なものが力士にならうと望んだとて、何の甲斐もなく、自ら人と交際するを嫌ひ乍ら、新聞記者たらんとしても成功すべきものでないやうに先づ自分を知ると云ふ事が必要であります。

一體人間には自分を偉く見る人と、自分を詰らなく見る人と二つの傾向が

ありまして、最も多いのは自分を偉く見る買被りであります。此の自己を買被る自惚根性から、よく「俺が居らなくなつては此の會社は駄目である。」など俺がくを頑張つて自分の意見が通らぬからとて、其處を飛出してしまふと、今度は何人も自分を信用してくれないので困る人があります。それは自分が偉かつたのではなく、其の會社に居つたから偉かつたので、其の會社の背景まで自分の力の如くに買被つてしまつて、會社を飛び出しては其の背景が剥がれて裸一貫で何人も相手にして呉れぬで困ると云ふ連中は少くないので其の最も著しい例としては、豊臣秀吉の愛妾であつた淀君の話が挙げられる事が出来る。秀吉在世の中は淀君の一顰一笑が秀吉を動かさし、其の秀吉の力が諸將に及ぶものであるから、部下の諸將達は秀吉の機嫌を損ぜざらん爲に淀君の一顰一笑に服従して居つたのであります。それは淀君が偉いのではなく、秀吉と云ふ背景があつたからである。然るに淀君はそれを自分の力の

如くに過信して、秀吉の没後、彼の關ヶ原の戦に於て、我が一令の下に天下の將士は動くと考へ、徳川家康に對して斯る大戦を惹き起したのであるが、事は志と違うて遂に失敗を招くに至つた、これらは餘りに自己を買被つた結果であるといはざるを得ないのであります。

之に反して又自己を非常に卑下して、自分は到底斯くの如き事は出来ない、出來得る力をも出さずして、遂に成功の機會を逸する人もあるので、古い歌にも「爲せばなる、なさねばならぬ、世の中にならぬといふはなさぬなりけり」とあります通り、自分でなさずして出來ないと諦めてしまふ連中もある。丁度精神異常者に誇大妄想と微小妄想とがあるやうに、誇大妄想は自己を買被つて失敗し、微小妄想は自己を卑下して成功の機會を逸する、此の自分を本當に見極めると云ふ事程必要な事はないのであります。

人は人と共に居るので、何事をするのにも自分一人では出來るものではない

のでありますから、相手の吉凶は直ちに自己の運命に關係し來るのであります。されば果して信賴すべき人か、信賴すべからざる人か、表裏のある人か、表裏のない人か、責任を重んずる人か、無責任の人か、といふ事を判定することが必要であるので、人物鑑識に一個の眼光を有する事は、運命開拓の光を見つけ出す事でありませう。

兎角人間は自己に諂ふものは之を近づけ、自己を誹るものは之を退け、適材を適所に使ふ事が出來ず、それに不平が起つたり、或は阿諛に惑はされたりするので、古來友を擇ぶ事を盛んに説かれて、論語にも「直を友とし諒を友とし多聞を友とするは益なり矣」「便辟を友とし善柔を友とし便佞を友とするは損なり矣」とあり、又「巧言令色鮮矣仁」で、自己に諂ひ來るものを近づけ、直言するものを卻ける爲に失敗を招く事が少くないのであります。若し人と交つて赤心を人の腹中に置くと云ふやうな至誠と、又毀譽褒貶をも之

を寛容するの度量とが自ら守る事固ければ友は必ずしも擇ぶに足らぬのである。殊に現代の如く多くの人に接觸する場合に於ては、よく其の人を察して、鑛山の坑夫が鑛石より金を採り出すが如く、眞に自己と事を共にするの人を見出さなければならぬ。

時と所とを知れ

時代は刻々に推移して我等は常に時代の波の上に立つて居るので、此時代の趨勢を知ると云ふ事が運命開拓に必要な事は今更言ふ迄もないが、此の世の中に處して居る多くの人々を時代と云ふものを中心として分つと、一番困るのは時代に遅れた人であつて、時代に遅れて事を考へて成功すべきものではないことは、此の電燈の光輝く世の中に行燈株式會社を拵へても成功し得ないので明らかなであるのに、そんな馬鹿げた計畫をする人はないが、此の

電燈輝く文化の世の中に、行燈時代の思想を以て其の儘に計畫を立てんとする人は、必ずしも少くはないのであります。

我等は時代に遅れてはならぬが、然らば時代に伴つて行けばよいか。時代に伴ふと云ふ事は人の後塵を拜する事で、大した失敗もなからうが、餘りに成功し得る方途ではない。眞に成功の道を得んとするものは、時代に先立つ先見の明がなければならぬ。時は進む、此の進む方途を知つて計畫を立て、こそ、成功の門は開かれるのである。然し乍ら餘りに時代と掛け離れて居つては、現代に行ひ得るものではない。人間の眼は天を見ても足は地面を離れぬのであるから、先見の明を持つ事はよいが、一歩々々進んで行く方途をも考へて行かなければならぬのである。更に一つ時代に超越した人があるが、これは世に處して運命を開拓して行くと云ふ俗界の人でなく、超然たる高見達識の士で、姑くこれは問題の外に置かなければならぬ。

所を知れと云ふのは、廣く言へば其の土地風土であり、其の事をなすの場所であるが、更に狭く言へば現在に於ける自己の地位である。氣候風土の影響は已にいふたが、商店の開設、工場の設立共に土地の關係を知るの必要なのはいふまでもなく、官公吏其他のサラリーマンとして自己の現在の地位を知ることが必要で此の地位を考へずして、無闇な計畫を立てるのは足を止めずして出さんとする如く決して成し遂げらるべきものでなく、寧ろ其の地位に安んじて着々歩を進むるの事を考へなければならぬのである。

黒田如水が豊臣秀吉に向つて、「あなたはどうして今日のやうに出世なされたか」と聞いた折に、秀吉は「別に出世の秘訣があつたのではなく、唯其の時々の仕事をよくしようと思つただけである」というたといふ話が傳へられて居る。秀吉は初め織田信長の草履取になつた場合は、草履取としては最も完全な草履取にならうと思つて營々として働いたから、「草履取には惜しい

奴」と足輕に取立てられた。こんなに苦勞してやうやく足輕かとそれを好い加減にして居れば生涯足輕で終つたかも知れないが、足輕になつた以上は、足輕は俺に限る。俺程忠實な足輕はないと一生懸命に働いたから、「足輕には惜しい奴」と侍に取立てられ、上り上つて現在の地位を得たので、人間は其の時々々の仕事に固く足を踏みしめて忠實に働いて行く事が出世の源である事を示して居るのであります。然るに今の人は大抵自己の地位に不平を抱いて、こんな事仕はどうでもよいと考へ、宜い加減ごまかしにして行くから、こんな人はどうでもよいと失業の苦をなめなければならぬやうになるので、此の時と所を知る事も運命開拓の基である事を考へなければならぬのであります。

周到の用意

自ら知り、他を知り、時を知り、所を知るの必要は述べましたが、成功の鍵を握るべき条件としては、こゝに用意周到と云ふ事を申さねばなりません。用意周到とは、初めに其の終りを察し、着手の時に、手を放つの機会迄も考へて置き、常に小事を忽せにせぬと云ふ事でありませぬ。極めて小さな事でもそれは懸て大なる事に影響して行くので、大きな事は何人も注意するけれども小さな事は、兎角粗末にするので、家計の上の事でも積り積つて山となるので、此の小さな事を粗末にせぬ所に家計の安定も得られるのであります。自己の修養に於ても、此の小事を忽せにせぬ所に開運の鍵は與へられるのであります。

一體人間と云ふものは、大きな事には誰も氣を附けるが、小さい事には注意を怠り易いもので、アメリカの成功者の一人にアスターと云ふ人がありまして、或る人が問うて

「あなたはどうしてそんなに成功なされたか、實に運の好い人である」と云ふと、アスターは答へて

「世には俺よりも運の好い人があつて好運に乗じ好機會を捉へて居るが、決して俺は運が好いと云ふのではない」

「それならばあなたの成功は努力に依るのですか」

と訊くと

「いや世の中には俺よりも、より以上の努力を致した者がある」

「それではあなたはどうして成功せられたのであるか」

といふと、答へて

「それは別に秘訣がある譯ではない。自分は唯常に小事を忽せにせず事毎に微細な注意を怠らなかつたからである」

と言ふたといふ事である。小事を忽せにせず、事毎に微細な注意を拂ふと

云ふ事は、他の言葉で言へば用意周到で、如何に時代に先立ち先見の明がありましても、此の周到なる用意を缺いては決して運命は開かれるものではないのであります。

臨機の才

如何に明察の智見があつて、自、他、時、所、大、小を察知する事が出来ましても、之を應用する臨機の働きと云ふものがなければ、折角の機會も取り逃す事がないともいへないのであります。

世の中の事は絶えず變遷推移して極まることのないものでありますから、其の推移の機に臨み變に應じて、其の時其の所行くとして可ならざるなく、其の宜しきに從ふと云ふ才が必要である。

或る小學校の先生が生徒に教へて、何時でも外から歸つたら靜かに戸障子

を開けて家に入り、親の前に出て靜かに兩手をついてお辭儀をしてから物を言ふやうにせねばならぬと言ひました。其の生徒も其の教訓を常に守つて居りましたが、或る時幼い弟を連れて川端で遊んで居りました時に其の弟が誤つて川の中に墜落しました。兄は驚いて早く父に知らせようと宙を飛んで息咳切つて家に歸りましたが、こゝが先生のおつしやつた所であると、家に近附くと俄かに歩調を弛め靜かに戸を開け、靜かに障子を開け、靜かに父の前に出て兩手を仕へて、「今弟が川に落ちました」と報告した。それは大變だと父親があはて、駆け附けました時は、弟は既に呼べども歸らぬ空しさ死體となつて居たと云ふ話があります。此の失敗は全く臨機の才がなかつたからで、常平生は先生の教へられたやうに爲してよいのですが、非常時に當つては又非常の才を働かして、こんな時には表から大きな聲で怒鳴り散らしてもよいのであります。

一體臨機の才と云ふものは事に臨んで本末輕重を心得る事であつて、何れが本か、何れが末か、父母に對して靜かに叮嚀にするのが子たるの道ではありませんが、更に其の根本の子たるの道は親の心を以て心としなければならぬ。親は其の子が川に落ちたと聞いたなら、一刻も早く知りたかつたに違ひない。さう云ふ折は其の親の心を心として早く知らず事が本であつて、靜かにお辭儀をする方は末である。此の本末輕重を誤ると大なる失敗をも生ずるので柳生但馬守宗矩が其の子十兵衛の劍技を試さうとして、或る時十兵衛が廁から出て手を洗つて居る隙を狙つて、物蔭からいきなり石飛礫を打つた。それが非常な勢で十兵衛の右の眼に當りました。すると十兵衛はハッと手でもつて左の眼を抑へた。之を見て但馬守は「でかした十兵衛」と賞めて、此の者は劍道に於て行末見込みがあると心竊かに喜んだと云ふ事でありませぬ。誰でも右の眼を打たれれば右の眼に手をやるのが普通であります。已に右の眼

を打たれた以上、第二の石が左の眼に飛んで來れば自分は盲になつてしまふ。もう打たれた右の眼は仕方がないが、今度打たれんとする左の眼を抑へた。こゝに物の本末輕重を瞬間に判斷する臨機應變の才があるのであります。故に機轉のさくとか、敏捷であるとか言はれるのは、よく本末輕重を機敏の間に洞察する心の働さであります。

果斷の勇

此臨機の才と共に開運の心力として數へねばならぬのは果斷の勇であります。先見の明があり、臨機の才があつて、斯くすれば斯くなると知りまして、斷然之を決するの勇氣がなかつたならば、躊躇 逡巡、時を移せば其の間に機會は逃げ去つてしまふので、斯くすれば斯くなると知り得た以上、斷然意を決して其の方面に進んで行かなければならぬ。世態時相は走馬燈のや

うに變轉して間斷がないので、事をなすの機は眞に電光石火である。徒らに躊躇逡巡して居れば折角握つた開運の鍵が掌中よりすべり落ちるのであります。古人も「事を決するは猶ほ癱を斷つが如し。多少の痛苦は忍びざるべからず」といつて居ります。癱は人の身體に出来る性の悪い腫物であります。之を切開しなければ遂に一命をも危ふくするのであります。併し之を切るのは痛い。痛い／＼と躊躇逡巡して居れば毒は全身に廻つてしまふので、一時の苦痛を忍んでも切つて始めて快く治るのであります。我々の事業を成しますにも、種々の障碍が附き纏うて之に打ち克つだけの果斷の勇がなければ斷じて運命は開拓し得られるものではない。

保元の亂の時に、鎮西八郎爲朝が策を建じて、必勝を期せば夜討に限ると申しましたが、左大臣頼長は、王者の軍に夜討はないと躊躇して之を採用しなかつたものでありますから、爲朝、退いて人に語つて長袖者流兵法を知ら

ずと罵つたが、果して其の夜敵に夜討を掛けられて味方は遂に散々に敗北したのであります。これは頼長に臨機の才がなかつたといはなければならぬので、先にも例を挙げましたが、彼の桶狭間の一戦に於て織田信長が雲霞の如き大軍に向つて進みましたのは、若し坐して来るを待てば滅ぶるの外はないので、一舉に雌雄を決せんとした此の信長の果斷が遂にあの成功を捷ち得たものであると思ひます。これは何も戦争の上ばかりでなく、我々が事をなすの場合に於て果斷の必要なるは申す迄もないのであります。

堅忍と自疆

然らば果斷の勇氣さへあれば何でも實行して功を擧げられるかと申しますと、果斷の強い勇氣があつても、之を繼續して行く堅忍の志がなければ萬難に打ち克つて進む事は出来ない。血氣に逸る青年には果斷の勇があつて一

時猛然として進みますが、此の堅忍の志がない爲に間斷なく起伏する諸種の困難に打ち克つ事が出来ず、發奮し進む事があつても、之を繼續し其の効果を收める迄は行かないのであります。例へばこれまで文學に非常に熱中して居つた者が何かに感じて法律をやらうと思ふ。併し新たに法律をやればこれ迄やつた文學方面の努力が無駄になる。併し無駄になる／＼と思つて躊躇逡巡して居つては何にもならぬ。事を決する、癪を斷つが如しと云ふので法律の方に轉向する。併し又法律も面白くなつてそれよりも實業に志さう。併し折角今迄やつた法律が無駄になる。無駄になる／＼と言つて躊躇逡巡して居つては事は決せられぬと云ふので、直ちに轉向する。斯くて様々に轉じて遂に何事も成し得ないので、社會に立つて事を成すのにも、或は商業をやつて見たり、工業に従事して見たり、或は會社員になつたり、店員になつたり、所謂尻の坐らぬ落付きのない者が成功する筈はない。一體

轉業と云ふ事は徒勞な能力の消費である。其の理由が谷口氏の職業選擇法に五つ數へられて居る。

- 一、轉職する迄に習ひ覺た技術なり手段方法なりを臺無しにしてしまふ。
- 二、轉職は第一回より二回と度重なるに従つて職業が劣下して行く。
- 三、轉職するにならされた者は一定の職に長く止まり難くなつて、移り氣になつてしまふ。

四、賃銀が漸次低下する。

五、失業者となる機會が多くなる。

等が數へられて居ります。これは業務に就ていはれたのであります。何事と雖も輾轉して效を收められるものではないので、昔の川柳にも「とんぼの飛び直しても元の枝」とあるやうに、彼方に飛び此方に飛んでも結局又元の枝に戻る。そして元の枝に戻る迄に他の人々は非常な進歩を遂げて居る。

従来成功した人の例を見ても堅忍不拔の精神で持續せずして成功した人は殆どないと言つても差支はないのであります。

堅忍の志を以て進んで行きましても、人は或る程度迄達しますと、そこに怠慢の心を起すもので、成功を目指して進む間は努力もし奮闘もしますがやうやく成功したとなると気が弛んで次に墮落の一步を辿るやうになる事が少くない。月は満つれば虧け、花が開けば散る。人間これでよいとなつた時程危険な時はないので、易にも「天行健なり君子以て自疆して息まず」とありまして、彼の日月が晝夜に運行して少しも怠るなきが如く、吾等は一生を通じて進み行くべき考へを忘れてはならぬのであります。

先に柳生十兵衛の話をしましたが、同じやうな剣道の話がある。それは神子上典膳と云ふこれは後に小野次郎左衛門と改名して將軍の指南番になつた人でありますが、まだ修業中の事、伊藤一刀齋の所に行きまして、剣道の秘

訣は何であるかと訊いた時に、一刀齋は「天行健なり君子以て自疆して息まず」で「油断する事勿れ」これが剣道の極意であると申します。典膳は「斯様な事は態々承る迄もなく、初めて剣道に志した時から油断なく修業を致して居る心算でございます」といふと、突然一刀齋は木刀を以てこれを打ちつけた。典膳が「参つた」と云ふと「油断する事勿れ」といはれましたから「今は話をして居る中である。試合を致して居るのではござりません」と言ふと「剣道は真剣勝負の稽古である。話中に敵が切り附けた場合に今は試合の場合でないと云うて、之を避ける事が出来るか、人生は戦場、剣道は常に真剣試合の覺悟を以て行かなければならぬ」といはれたので、これでは油断がならぬと、常に一刀齋に師事して技を練つて居りますと、少しでも隙があると思れば、一刀齋はピシリ／＼と打ちつけて其の度毎に油断する事勿れと言はれる。起きて居る中は油断がなくて打ち込む事が出来なくなると、

今度こんどは典膳てんぜんの寝ねて居ゐる所ところにソツと行いつてピシリとやる。「先生せんせい寝ねて居ゐる中は別べつでございます」といふと、「剣道けんどうは眞劍勝負しんけんせうぶである。いざ戦争せんそうとなつた場合は夜討ようちもあり朝あさがけもある。寝ねて居ゐるからと敵てきが許ゆるすか、油斷ゆだんする事こと勿なれ」と教おしへられ、寝ねても覺さめても油斷ゆだんする事ことが出来できず、段々だんく修業しゆげふの功こうが積つみましてもう打うち込こむ隙すきがないやうになりましたが、或ある時ときどう隙すきを見たか一刀齋いっとうさいがピシヤリと打うち込こみました。もう其その機きを察さつしてヒヨイと身からだ體たいをのけて、「先生せんせい如何いかでござる」と言いうた。其その先生せんせい如何いかでござると云いふ所ところを一刀齋いっとうさいがピシヤリと打うちつけたと云いふ話はなしがある。打うたれまいくと修業しゆげふして居ゐる中は油斷ゆだんもなかつたが、今いま都合ごうご好こうく避さけ得えて「先生せんせい如何いかでござる」と言いつた時ときこそ油斷ゆだん大敵だいてきである。成せい功こうしようくと進すすんで居ゐる間あひだは油斷ゆだんも隙すきもないけれども成せい功こうし得えたと思おもつた時ときに、そこそこに油斷ゆだんが生せいじ來きたつて、其その間隙かんげきより折角せつかくの成せい功こう者が失しつぱい敗はいへの途道みちを辿たどることが少すくくないから、常つねに自疆じきやう不ふ息そくの精神せいしんを以もつて

進すすんで行いかなければ、折角せつかくの成せい功こうも亦また失しつぱい敗はいしてしまふやうになり、折角せつかく開ひらき得えた運命うんめいも亦また閉まとざされてしまふものである。

開運と道徳

以上いじやう數かずへ來きたつた條じやう件けんは總すべて自じ己こを中ちゆう心しんとし、自じ己この心しん力りきを以もつて進すすむべきをいふたのであります。人ひとは人ひとと共ともに生いきて行いくので、他た人じんに對たいする同どう情じやうの念ねんなくしては到底さうてい運命うんめいは開ひらけるものではないのであります。同どう情じやうは人ひとと人ひととを相あ和わせしむる本もとで、此この人ひとと人ひととの和わこそ道徳どうとくの源げん泉せんで、釋しやく迦かの慈じ悲ひといひ孔子こうしの仁じんといひ、基き督とくの愛あいといふ皆みな此この源げん泉せんより進すすり出でたものに外ほかならぬので、世よに立たつ事ことを願ねがはんとするには人ひとと相あ離はなるとことは出で來きないであらますから、自じ分ぶんのする事ことが、若もし他たの總すべての人ひとから反はん對たいされるものであつたならば、如何いかに果斷くわだんの勇ゆうあり、如何いかに堅忍けんじん自疆じきやうの精せい神しんありましても、到底さうていそ

それは成功すべきものではないのでありますから、自分の開運を遂げんとするものは、徒らに自分の利害のみを考へずに、同時に他人の利害をも考へ、これに對して常に同情の眼を注ぐといふことが必要で、他を排斥する事のみを計つて斷じて成功するものではありません。我れ人に對して潤ひのある暖い思ひ遣りがあれば、人も亦親しみの情を以て我れに對し來るもので、我れを助ければ彼又我れを助ける。古人が仁者敵なしというた如く、人が皆な其の人の成功を望む時、何の開運を妨げるものがありませう。自己の同情は他の同情と映發して開運へとの方途を辿るものであります。

昔徳川家康が織田信長と力を合せて甲斐の武田氏を滅した時に、敵の大將の勝頼の首級が此の兩大將の實檢に供せられた。先づ信長の前に持つて行かれた時に信長は其の首級をハツタと睨みつけて「汝若輩の身を以て天下の豪將たる信長に敵對せしが爲に斯る有様になつた。身の程を知らぬ愚か者で

ある」と大いに罵つた。それから次に家康の前に持つて來た時には、家康は今日勝頼の首級が來る日であると佛壇に燈明を上げて待つて居つた。そして首級を其の前に置いて「亂世武門の習ひ、互に敵となり味方となるのは致し方のない事であるが、何時かは互に手を取り合つて親しく物語りをする折もあらうと思つて居つたのに、痛はしや斯くの如き御姿になられたか」とハラ／＼と涙を流して敵將の死を悼まれた。此の話聞いた甲斐の武田氏の遺臣等は、何と考へたでせう。皆な信長の仕打を憎み、家康こそ、天晴血あり涙ある大將よ、此の人の爲には身をも惜しまず」と感動して皆な家康の幕下についたといふ話があります。此の家康の勝頼の首級に對する同情の念は直ちに徳川三百年の基礎を成した一因であると思つて見られますので、我等が社會人として社會に生きて居る以上、常に世の爲、人の爲と云ふ事に着眼して進んで行かなければ、開運の道は開かれない。それには身を殺して仁を爲すの

犠牲の精神も亦必要である事を數へて置かなければならぬのであります。

一切の道徳は開運の方途を示したもので、道徳に背反して眞の開運を計れないのであります。かくいへば世には道徳と常に相離れんとする利益問題があつて、道徳のみを守つては生活に必要な利益は得られず、開運の方途立ち難しといふ人があるかも知れませんが、道と利とは決して離るゝものでなく、此の利益と道徳との關係を考へるに於て、道徳に活きた道徳と死んだ道徳とあることから見ねばならぬ。死んだ道徳は世の中を離れて獨り自ら淨うするので「こゝもまた浮世なりけりよそながら思ひしまゝの山里もがな」と云ふやうに超然として獨り自ら保つのであるが、活きた道徳は此の社會の眞つ只中に立つて自己の運命を開拓すべく進むので、此の活きた道徳と利益との關係を見ると、利益にも又一時的の利益と永久的の利益との區別がある。一時的の利益を得ようと云ふのならば、如何なる不道徳家と雖もこれが得ら

れない事はないのである。然し乍ら孔子も「不義の富貴は浮べる雲の如し」と云はれた如く、其の利益は決して永續するものではない。一時的の利益を得ようとするならば、人を欺いても得られるし、悪い品を高く賣つても得られる。然し悪い品を高く賣つて一時は利益が得られるやうであるが遂に誰も買ふものがなくなつてしまふ。若し永久的利益を得ようとするならば、良い品物を安く賣らなければならぬ。それは目前の利益は少いやうであるが、總て大いなる利益を得られるのである。昔或る商人が其の子を戒めて「商人の道は底のない柄杓で桶に水を入れるやうなものである。底のない柄杓でも水を潜つて來るから一滴二滴は残る。其の水が一滴二滴三滴四滴五滴と積り積つて桶一杯の水となる。それをそんな事は面倒だからと底のある柄杓でサツサと汲み入れる。汲み入れれば直ぐ一杯になりそうだが、肝心の桶の底が抜けて居れば何にもなるものでない」と言つたといふ事でありませうが、道徳は

即ち桶の底である。道徳の基礎があれば目前の利益は少くとも永遠の利益が得られるのであつて、道徳と經濟、道と利とは決して背反するものでない。然るに道に反いた一時の利を貪らんとするものは、一時は成功のやうであつても、それは臆て失敗の本である事を知らなければならぬので、眞の開運は眞の道徳と背馳するものにあらざるを充分に認知せねばならぬ。

人事轉變、運か、命か、人か、運あり、命あり、而して人最も力ありと申してこれを結ぶことにいたします。(了)

附 録

自己の運命を語る

録附

自己の運命を語る

六十一年の我

有爲轉變……大阪より京都へ……測量技師を志す……代用教員……演劇と茶の湯……擊劍と
運命……演説の稽古……時勢と恩師……笈を負うて……五十年前の東京……玄關番……法律
と文學……下宿料と原稿料……佛教への因縁……新家庭……出版屋開業……佛教學校の先生
……文筆生活……明教新誌時代……筆舌傳道……高利借り生活……全國行脚の志……笥ぐら
し……社會運動に傾く……先輩友人の助力……著者と出版業者……著述が勉強……時代の變
轉……一眼を失ふ……官民協力……チョット金持……聖恩微臣に及ぶ……依然たる老養生

『賣卜者身の上知らず』といふ。我、今、運命を解剖して自ら顧る時、我も亦運命に
翻弄せられつゝ今までどうやら生き來りし過去の追懷を録してこれを本書に付するも
無駄ではあるまいと、曾て干支一巡せし還曆を機として綴りし『六十一年の我』を補
修して之れを添ふことゝした。嗚呼六十一年、今はそれも過ぎて古稀に近く、其間
の禍福吉凶、運か、命が、抑も亦人か、平凡人の平凡生活にも此の波瀾あるを想ふて

運命考察自省の一助とする。

◇有 爲 轉 變

烏兔匆々、六十一年を送つた。

悠久なる歲月の上より見れば六十一年は一瞬であり、宏大なる天地の上より見れば、我が存在は一粟粒にも價しないであらうが、此我を中心として六十一年を回顧すると、世の變化の實に著しきを想はざるを得ない。

明治維新、それは日本歴史の大轉機であつた。それが眇たる僕の運命にまで影響するのだから恐ろしい。

僕が呱呱の聲を擧げた明治三年は、王政維新の業成つたとはいへ、まだ舊藩は依然として存し、藩主は知事と名を改めたのみで、舊臣は昔ながら此殿様に仕へて居つたので、僕の家も山陽の一小藩に祿を食み、藩中では門閥家の中に算せられて居つたのだから、其の長男として生れは僕は、お乳の人までつけて育てられたのだ。それがどうだ、藩籍奉還と共に祖先傳來の家祿は一枚の公債證書と代つて、今でいふ一種の失業者となつて大阪に飛び出し、大小捨て、算盤をと、目先のきいたのは結構だが慣れぬ士族の商賣に、松屋町ら九郎右衛門町、それから谷町と轉々してすつてんころり、初めの勢ひ何處へやら、僕か

の心づく頃は九尺二間の裏長屋に、昔を語る貧乏暮しとなつて居つたのである。

◇大阪より京都へ

曾て『我が亡き祖母』の一文の中に其頃の追懷を語りて

諺にもいふ士族の商業、殊に潤達にして無勘定なる父上の儲けたまふべきはづはなく忽ちの中に倒産の非運は我が一家を見舞ふたのである。父上は如何かして之が回復を計らんとて千辛萬苦したまひ、母上は心痛のあまり乳も出でねば、我が弟(亡き)を懷にして日夜に泣きたまひ、一家は實に悲酸の極に達したのである。今も記憶してをる。大阪谷町の佗住居に、夜に入るとも點すべき燈油がないので祖母上は縁日の眞似ぞとて焚火して吾を慰めつゝ一夜を明かされたことがある。祖母上母上は賃仕事の忙はしく飯焚きたまふ間もなく、吾には芋を與へて、『今日はこれにて辛抱せよ』といはれたことがある。

其の間、父上は旅に出で、いろ／＼計畫をせられたが悉く失敗に終つて遂に牙籌を抛つて京都に出て某新聞に筆を執らるゝことゝなつた、其の時は予は早や學齡を過ぐる

こと三年となつてをつたのである。僕の家の変化も甚しいが、世の中の變化は更に甚しく、國を出る時は駕籠で出たさうだ

が、いつの間にかやら人力車といふものが出来る、明治十年、大阪から京都へ出た時にはチャント汽車があつた。

◇測量技師を志す

『神は天地の主宰にして人は萬物の靈なり』といふ西洋翻譯の讀本を小學校で教へられたのは京都で、其の時の同級生が今も心易く願つて居る文學博士藤岡勝二君だが面白い、初めは稚松小學校、それから有隣小學校に轉する間に、學制は數回變つて初等、中等、高等となつて、生理や物理や博物や化學、簿記に代數平面幾何まで小學校で習つた其の頃、僕の隣りに梶原といふ測量の技師が居つて、僕にいろ／＼數學や物理を教へてくれて、僕も行く／＼は測量技師になるつもりで、三角などを面白がつてやつて居つたから、數學では學校の先生以上であつた。それが、どうだ今は加減乗除もろくに出来ない。

此技師は何でも逢阪山のトンネル工事に來て居つたので、僕は此人に就いて英語の手ほどきもして貰つたが、其の後は四條教會の井手義久先生に就いてパレーの萬國史が讀める位になつた。

こゝで一寸話が前後するが、我が身邊の運命を語るべく、父を喪ひし時の追懷の一節を挿む。

前申す通り、慣れぬ士族の商業に忽ちの中に零落いたしましたして、とても御話にならぬほどの貧窮に陥つたのであります。其の中にも此の子を立派に育てたいとて、私に貧苦を知らせまいと苦心せられたことは思ひ出しても涙の種であります。或る時私が近所の子がいろ／＼な見世物を見せてもらふのに、僕ばかりデット家に遊んで居るのを嫌だと申しましたものですから、父は少しの金を工面して私を大阪の千日前と申す見世物小屋へ連れて行つてくれたことがあります、何の不幸か、父が持つて居りました少しの金を掏摸に盜られて私は道から泣く／＼歸つて來たことがあります。其の折の父の心はドンナであつたであらうと今思ひ出しても涙を止ることが出来ません。かゝる貧苦の中に私を小學校へも入れ、私の祖母——今は亡き人の數に入りましたが——は私に學資を供するために其の頃五十歳の高齡でありましたのに、女學校の選科に入りまして教員の資格を得、其の俸給を持つて私を小學校以上の教育を受けるやうにしてくれました。私はかゝる父母や祖母の苦心の中に教養せられましたので、父の苦勞に對しては特別の有難さを感じて居るのであります。

僕は實に當時八年制であつた小學校さへも祖母の助力なしでは續け得られなかつたのである。

◇代用教員

小學校を卒業してから僕は學資の都合で、師範學校に入るつもりであつたが、體格試験ではねられて、「どうも肺が悪い」とやられたが、肺なんぞは少しく悪くない、遊んで居つてもといふので、有隣小學校へ今でいふ代用教員、其頃の授業生といふものに雇はれた月給壹圓五十錢、それが二圓五十錢になり、三圓になり、四圓になつた間に、僕も大分生意氣になつた。

何しろ漢學仕込の老教師の中では、授業生ながらも僕等は新知識で、校長の日比野勇次郎先生と、今も童話や俳句で關西に名を知られて居らるゝ岩井藍水先生とが師範學校出でこの外に、僕の生徒の時に授業生として今も一徳會の世話をして居られる柴田寅三郎先生が居られた。此先生は僕が授業生になつた時分には師範學校に入學して居られたが、有名な心學の大家柴田鳩翁の孫になるお方で、お宅は修正舎といふて時々心學道話が催されたから子供の時分からよく聴きに行つたものだが、授業生になつた頃には道話などは古臭いと、新しい方へへと向つたものだ。それが今日修養道話を試みたり、心學道話全集を監修するやうな運命に至つたのだから、人間の一生はどう變るものやらわからない。尖端を突破しようとするものは必ずしも現代人には限らない。新らしがりやの僕は二圓

五十錢で洋服を、しかも月賦で拵らえて之れを着込んで、月給の方は家計の補助に廻さねばならぬが、自宅へ習ひに来る子供が五六人あつたから其の月謝で新刊の書を買ひ、萬國新史や輿地誌略、物理全志などを耽讀して老教員達を驚かして得々たるものであつたが、其の中にコンナことして居つても仕方がない、いつそ背水の陣を張つて一勉強してやらうと、友人の就職口を求めて居る男を學校へ推薦して、自分は自宅へ來る生徒を少し多くしさえすれば、どうかかうかやれると、斷然、職を辭して就學の途を講ずることにした。時に年十八。

◇演劇と茶の湯

僕が幼年時代に印象づけられて、それが今も去らぬものは演劇の趣味である。たしか四五歳の頃、祖母に連れられて大阪の中の芝居に尾上多見藏の石川五衛門を見て葛籠を背負つて宙乗りをしたのが、如何にも不思議で「葛籠を背負つたのが可笑しいかアハ、ハ」とやつた臺詞までも長く記憶して居つたものだ。其頃、父は俳優の徒弟に讀書を教へて居つたので、いろ／＼な役者の子が宅へ出入りしたのを覚えて居る。雁次郎とか卯三郎とか駒之助とかいふ連中も來たのか來ないのか知らぬが、其後も父に連れられて樂屋を訪ふた事がある。

京都へ出てから僕が習つたものに一寸風變りのものは千家裏流の茶の湯だ。それは近所に前田瑞雪といふ宗匠が居られて、十一、二歳の頃からこれは師事して二、三年の間に小習から臺子まで進み、初傳の免狀のやうなものを貰つて、ちよいと人前に出られるやうになつたが、其後ソナものは皆な忘れたが、茶爐に松風を聴き、苦茗に心神を淨くする底の趣味は今以て忘れられぬ。かくて此老人臭い子供は生涯を通じて茶氣を帯び來つたのだ。

◇撃劍と運命

此頃今一つ學びかけたものがある。それは全く風變りの撃劍だ。元來自分の家は中條流の一派山崎流の免許を受くべき家柄として先祖代々これを繼承し來つて父の代に至つたのであり、母方の伯父は眞影流の達人として武者修行をもし、晩年には京都監獄の撃劍の指南をもして居られたのだから、是非、劍術の一手二手は覺えておけといはれて伯父の道場へ通ふことゝなつたが、遠慮なく、ピシヤリ／＼となぐらるるので、コンナ痛いことはやめだと、タツタ二日でやめてしまつた。

しかし子供の時分から此伯父——久しく宅に同居して居られた——に聞いた武者修行の話や、劍禪一味の談は今も我れを益することが多い。

此伯父は非常な迷信家で八卦九星方位方角のことをやかましくいひ、それには僕の祖母

と相槌を打つて、或る時は祖母の知人に伴はられて伏見の稻荷の山で瀧に打たれて居る行者に稻荷降を頼んで僕の運命を豫言さしめたことがある。いろ／＼な書物を集めて居つたので、子供心にも「三世相大雜書」などに興味を持ち、守本尊に對する信仰などが其頃から心の芽を培つて、今は民間信仰や運命論に興味を持つやうになつたのも此影響であらう。話が大幅前後したが、僕が小學校の授業生をやめた頃には、世は國會開設の準備に忙はしく、自由民權の議論は青年の血を湧かし、政治法律に志すにあらずんば、何事も成す能はずといふ風であつたから、僕は晝は平井金三先生のオリエンタルホールに通ふて英語を學び、夜は其頃新に開校せられた京都法學校に入ることにした。

◇演説の稽古

平井金三先生のオリエンタルホールは佛教主義を以て同志社に對抗するといふ勢ひで生徒の數も頗る多かつたが、其の教育は全く變則的で、リーダーの四位が讀めるやうになると直にヒュームの英國史、アモスの政治學、フォーセットの經濟學、スペンサーの代議政體といふ風の硬教育で、なか／＼わかるものではなかつたが、生意氣盛りの青年、しかも政治熱に浮かされて居るから、どうかかうか理窟をつけて輪講などの節には氣焰を吐いたり、間違つて笑はれたりしたものだ。

此學校には雄辯會があつて當時塾頭格の貫名善四郎氏——後の野口復堂君——が會長格で、久しく京都日出新聞の主筆をして居つた大道和一君、後に讀賣新聞の社長たりし松山忠二郎君等と共に辯論を弄したので、此雄辯會には參加して居られなかつたが、當時紅顔の美少年致々として勉強せられて居つたのは今の文學博士姉崎正治君であつた。

京都法學院の方は司法省法學校の法律學士連中の創立で、寺町の大雲院といふお寺を借りて教場に充てられ、山崎惠純氏校長となり河村善益、志方鍛などといふ京都地方裁判所の判檢事連によつて教授せられるのであつたが、この二年級の時に、僕はどうしても東京へ出て一勉強したいといふ志が切になつて「學資などの心配御無用どうしてでもやつてのけます」と父母並に祖母の許を得て、着々其の準備を運んだ。

◇時勢と恩師

此僕の上京の志を切ならしめしものは當時の新聞であり、雜誌であり、新刊の著書であつた。元來、僕は雜學の癖があつて、手當り次第、何でも讀み、一時は貸本屋の小説に讀み耽つて殆んど之れを讀破し、新刊を渉るやうになつては當時流行の政治小説東海散士の佳人の奇遇、末廣鐵腸の雪中梅、矢野文雄の經國美談、尾崎行雄の經世偉勳、さては春のやおぼろの書生氣質を讀むにつれて東京戀しく、男兒、事を成す帝都に出でずんばとの意

氣を旺んならしめた。

國會の開設は早や兩三年の後に迫り、國事犯事件は諸所に行はれ、政府は斷乎として保安條例を布き民間有志を皇城三里以外の地に放逐したといふ時勢の急轉は、到底ヂツとしては居られない。其の頃僕は毎日曜に中外電報——其頃京都唯一の政治新聞——の主筆宮城坎一先生の所へ作文の訂正を請ひに行つて居つたが、或る時何の論文であつたかに「徳富猪一郎曰く」と書いて當時賣出しの氏の言を引いた所が、先生は鬚然として一介の青年徳富の言を權威あるものゝ如くに引用するは不見識此上ない今少し自重して作れと一喝せられたのを記憶して居る。

僕がいよゝ東京へ出て苦學せんとする志を此先生に告げると「それもよいが、勉學中は決して新聞雜誌を手にするな、君のやうなものは之れを手にとると學業は荒む」と教へられたが、東京へ出る道から其の禁を破つて、折角志を立てゝの修學も終に業成らずして碌々生を送るに至つた。先生の訓誡を思ひ出すと、今も冷汗背に下るを覺ゆる。

かくて僕が六圓餘の旅費を工面して上京の途に就いたのは二十歳の春、明治二十二年一月三日であつた。

◇笈を負うて

いよ／＼出立の間際に友人や知己から餞別として贈つてくれた金が壹圓や五十錢集めて四五圓になる。それに道中の用心にと祖が襦袢の襟の中に縫ひ込めてくれた金が貳圓、これに先きに工面したのを加へて合計拾幾圓といふ大金を以て、生れて初めての旅に上ることゝなつた。

幼少より父母と共に轉々として育つたがまだ一日も父母の膝下を離れて外泊したことのない僕が、遠い東の旅に上り、いつ成功して父母に會することが出来るのかわからぬのであるから、如何に青年の客氣に燃ゆるとはいふものゝ、イザ出發となると涙なきを得なかつた。

今から思へば其頃の東京は不便なもので京都驛から大津の馬場驛まで汽車で出て、それから太湖汽船會社の船で長濱へ渡るのだが、船は小さし、比叡風はひどし、琵琶湖が之れでは遠州灘は何うであらうと前途頗る心細からざるを得なかつたが、それでも、どうか、かうか、船暈を耐えて長濱に上陸、こゝで又汽車に乗り換へて其頃の終點であつた、美濃の岐阜に着き、それから桑名行きの夜船の出る所をきくと、それは大垣からだ。こゝまで來ては引返さねばならぬといふ、大垣行きの汽車はもうない、厭でも應でも人力車でなければ間に合ふまいとの驛員の教へに、それではといふので大垣まで三十錢の約束で引返す

ことにしたが、時に午後六時、寒さは寒し、淋しさは淋しい、若し車夫が泥棒でもあつたらとつたらぬことまで心配して戦々競々として乗つて居ると、トある川端へ來て、突然車を止めて、旦那、降りて下さいといふ、的切り泥棒、初めての旅に、飛んだ目に遇ふものだ、度胸をきめて何んだ、ヘイこゝは長柄川の渡船です、何のことだ、と胸なでおろして車と共に渡り、かくて午後十時に出るといふ川船に漸く間に合ふべく大垣に着し、苦で掩ふた和船に乗つて木曾川を下る乗合は母親につれられた若い娘さんと、商人らしい男が二人、下級官吏か、それとも三百代言かと思はるゝ髯を生やした男が一人、僕ともに都合六人、小さな火鉢を圍んで、雑談の花は咲くが、世馴れぬ僕は獨り今頃は祖母は、父は、母はと思ひつゝうつら／＼と居眠る。

苦を射る日の光りに、外を見れば、水は河口に近く、洋々として芦荻の間を過ぎて漸く桑名に着き、こゝの腰掛茶屋で、焚火にあたりつゝ名物の焼蛤に朝飯を済まし、人力車を雇ふて四日市に出で、正午出帆といふ薩摩丸に乗る。船の大きいのに先づ安心をしたが、船内の異臭に少からず閉口しつゝ三等乗客の寢臺たる吊り床に上る。船内では成るべく物を食はぬやうにせよとの父の教訓を守つて僅かに梅干位で箱辨當の一隅を食し、船の動くに任せて横臥す。やがて伊勢灣を出で、遠州灘へとかゝる頃から、動搖頗る甚しく、或は

九天に上るが如く、或は九地に下るが如く、嘔吐の音は四邊に傳播して「ボーイさん金盥を下さい」といふ聲は一種の悲惨味を帯びる、其の中に船に慣れた人も見えて甲板に出で「鳥も通はぬ八丈が島へ、やらるゝ此身は厭はねど、あとにのこりし妻や子が」と謳ふ哀音切々胸を痛ましめたが、それでも相模灣を経て東京灣に入る頃には皆々勢ひ付いておの／＼上陸の用意をする。

◇五十年前の東京

横濱に着いたのは一月の七日、早速新橋に向ひ、初めて憧憬の都の玄關口に立つたのが午後二時、直に車を雇ふて神田連雀町の母方の叔母の家をたよることゝしたが、東京の第一印象に必らずしも人を驚かすものではなかつた。東京は繁華の所、人混みの所と聞いて居つたが、それは新橋驛頭一二町の所、車は土橋から丸の内に出で、日比谷の練兵場の横から堀端を右に所謂三菱の原を見つゝ神田橋へ抜けたのだから、依然武藏野原で、「何んだコナ淋しい所か」と思つた。

が、神田へ着いて四五日は御厄介になりますと頼み込んで、土産物などを出し「マア大きくなつたネ」の月並的挨拶があつて小憩後、小川町あたりなども見ておいでといはれたので、出て見て驚いたのは人の雑踏、特に書生の多いのには呆然たらざるを得なかつた。

小川町通りから神保町を、神保町から九段坂上まで上つて大東京の一面を下瞰した時に、初めて成る程東京は廣いと感じ、歸りには裏神保町の通りの本屋のズラリとならんで居るのに一驚を喫しつゝ叔母の家に歸り、幸ひ二階が明いて居るから幾日でもといはるゝのに安心して、當分こゝに厄介になることに決め、徐ろに前途の方策を講ずることゝした。

叔母がいふのに、何方へ使つて貰ふにしても、東京を知らねば使に一つ行くわけにもいかぬから、先づ東京の地理を知るがよいといふので、其の翌日、叔母が買つてくれた麵麩を兵糧として草鞋ばきで東京一巡ときめて、先づ柳原通りから兩國橋へ出て其頃ズラリと並んで居つた繪草紙屋で東錦繪に見入り、橋を渡つて回向院、こゝに講談で讀んだ鼠小僧の墓があるのかと門前を素通りして本所太平町に舊藩主の令弟信陵君のござるのを訪れ、そこで茶菓の饗應を受け、小使にせよと一圓札一枚を貰ひ、龜井戸の天神に詣で、太鼓橋を渡り、引曳通りを向島へとたどり、言問ひの渡をわたつて淺草に出で、其頃名物の一つに算へられてた富士山の模型に上つて公園内の雑踏に驚き、人混みを縫うて觀音堂に詣で、仲店から廣小路、そこで一區二錢の鐵道馬車に乗つて上野に出で、上野公園を一巡して鶯谷から根岸に降り、これが小説にあるさゝやきや根岸の里かと閑寂なる別莊地、町を流るゝ小川に大根を洗ふ鄙びたるさまに面白味を感じ、いづこの家よりか洩るゝ琴の音に

詩人のやうな心を起し、他日成功したら、コナ所に住居を定めたいなどと空想し、根岸を離れて日暮里に出て、これを日ぐらしの里とよんで、ますく雅趣を感じ、こゝらで腹をこしらえておくと、路傍の石に踞して叔母が買ってくれた麵麩を食つて、飛鳥山に上り王子権現に詣で、駒込通りをまつすぐに高等學校前から大學前、神田明神前を通つて萬世橋に出で、歸つて叔母に報告すると「よく歩いたね、しかしそれで東京の半分にもならぬよ、東京十五區の中、おまへの歩いたは、神田、本所、淺草、下谷、本郷の五區だけまだ十區ある」といはれたの、でなかく廣いと感心する。

「今晚は叔父さんが、おまへに御馳走してやると被仰るから疲れたらうが、お伴するとよい」といはれるので、叔父につれられて本郷の「江知勝」といふ牛肉屋に行く。此叔父は京都の高倉家の家來で、早く商業に志し、莫大小商として相應に成功して居つたので、家には雇人の五六人も居つた。さて此牛肉屋で、初めてカツレツといふものと、オムレツといふものを食はされて、これが西洋料理かと、一も二もなく喜んだのを記憶する。

東京見物は、これ位にして第一目的の修學をせねばならぬ。それには國を出る時から英吉利法律學業ときめて居つたのだから、早速學校へ行つて交渉すると、今は學期の半で入學は許さぬが聽講生として來て居つて學期の初めに入學試験を受ければよいといはれるの

で、さうすることにきめて、月の半ばからは月謝も半額といふので、もう四五日のことだから十六日から入學することとして、其方の手續を済し、いよく東京學生となつて通ひ始めたが、京都あたりで想像したより香氣で面白い、中にも奥田義人氏の法學通論、江木衷氏の刑法など來ては演説をきくよりも愉快だ。

◇玄 關 番

此方はそれでもよいが、何時までも叔母の家に厄介になつても居らず、何處か書生の口でもないか探して居る中に、或る人の紹介で京橋の橋本といふ實業家が書生一人位置いてもよいといふので、其處へ行くことになつたが、とても叔母の家に居るほど氣樂ではない、下女が居らぬから飯は焚かされる。ふき掃除はさされる、使にやられる學校は休ませられる。やがて試験前だといふに、こんな所に居つては勉強も何も出来るものではない。宅の大將は書物など讀んだことはないのだ。コナ人に書生の氣がわかるものか、出て行けばなんとかなるだらうと、友人の居る神田の下宿へ轉がり込むことにして、一ト月ばかりで暇を取つたが、別に手當をくれたのでないから行李を運ぶ金もない。仕方がないと荷物を背負つて數寄屋橋から三菱の原を横切つて神田へ出るのだが、荷物は重し、力は弱し、幾度も途中で休んで、「あゝ五錢あつたら車に乗られるのに」と嘆じたが其五錢どこ

ろか一錢もない。

◇法律と文學

兎に角、神田の下宿へ落ちつき、持つて來た書物を賣つたり、着更への着物を典じたりして下宿料の内金を入れ、こゝに安住の地を得ることになつた。其頃下宿料は室代共、一ヶ月貳圓五十錢、それに石油代や炭代がつくから、まあ三圓もあれば大丈夫といふのであつた。

此下宿で英吉利法律學校の一年生の試験を済したので、實際に二三ヶ月しか聴講して居らなかつたが、幸に及第して二年生となつた、同期の生徒で今も記憶して居るのは後に代議士になつた黒須龍太郎君、檢事正になつて物故せられた、高野兵太郎君等である。學院は後に名も東京法學院と改められ、只今の中央大學の前身である。

法學院の方は夜だから晝間遊んで居るのは無駄だと、其頃三田から轉じて錦城學校と改名して英語專修科、漢學專修科を置くといふことになつたのであると聞いたので、それに入學することにして、坪内雄藏氏のラムのシエクスピヤーや、森田思軒氏のラ・ミゼレーブル、依田學海氏の八大家文、平井魯堂氏の論語などといふ講義を聴いて、同窓生と共に「攻玉集」といふ雑誌を編輯して文筆を競ひ、諸先生の批判を仰いだことがある。

◇下宿料と原稿料

學校の方はそれでよいが、生活の方は全くなしで、辯護士を頼んで寫字をやつたり、新聞の賣子の口を探して友人の下宿を尋ねて賣り歩いたり、知人が古本屋を出して居るので露店を出したりして見たが、どれもこれも成功せず、一日二日でやめてしまふのであるから下宿料は到底稼ぎ出せず、二月三月と溜つて行くから、奮然下宿の女將に談判して、これまでのを待つと共に、アト六ヶ月ほど置いてくれ、其間に屹度支辨して決して迷惑をかけぬと談判すると、此女將は天野操といふても尾崎行雄氏の縁つきとかで、非常に俠氣のある人で、「いひにくひことをさうまで被仰るのなら待ちませう。しかし六ヶ月経つても出來ぬと被仰つて、それは裁判にかけても承知しませぬぞ」といふ。「よろしい。僕も男だ」と、それからいろ／＼口を探して見るがうまいことはない。

所が、友人の田中義成君（これは後に控訴院判事になつた人で、歴史家の田中博士とは同名異人）が、其又友人の伴山三郎君を通じて、此頃博文館で萬國歴史全書といふものを出す。其佛蘭西史を坪谷水哉君が受持つて居るのだが、なか／＼忙しくて筆が執れぬから其原料となるやうに書けば幾許かの原稿料を出すといふ口を探して來た。出來るか、出來ないか解らないが、此口を逃がしては大變と、二人で兎に角引受けることになつて、二三

の英文佛蘭西史を買ひ込んで来て、ポツ／＼翻譯にかゝる。原書を読む力の薄い上に、文章が拙い。二三ヶ月かゝつてどうか、かうか仕上げ持て行つたが到底ものになりそうもない。それで坪谷君の寛大と伴君や田中君の骨折で、二人の頭四十圓といふ原稿料を貰つた。おの／＼二十圓宛、僕は早速全額を下宿の女將に提供してこれで幾月分でも取つてくれといふと、女將は感心して、「これを皆貰つては、あなたの小使もなくなる。それに此寒空にソナ着物でも、外へも出られまいから、此處は十圓だけ貰つて置ませう。あと十圓で着物をお造りなさい」と洋服屋を呼んで七圓五十錢で背廣を新調して、アトの貳圓五十錢は小使になさいと返してくれた。

これで本人文士氣取りになつて、諸方の雑誌に投書する。それが幸に掲載されるといふので頗る得意點、其の中に同郷の先輩堀内靜字君から佛教雑誌へ書いてくれ、ば幾許から原稿料を出すといふので、同君の主筆せられて居つた「浄土教報」をはじめ佛教新運動等に書くといふ五十錢位くれる。これが佛教へ縁が出来た初めで、其の縁で築地本願寺の英語や歴史地理といふ普通學の先生に雇はれることになつて、月給十圓、これでは立派に生活が出来ると、下宿料滞りは月賦返済といふことで納得さして、僕の身の落ちつきを指折り數へて待つて居られる祖母を京都から呼び寄せて神田小川町に小さな家を持つことにした。

た。

◇佛教への因縁

積徳教校に教鞭を執るに至つた前後即ち明治二十四年——僕が二十一二歳の時は一身の方向に於て頗る去就に迷ふたのだ。元來が法律を目ざして上京して來たのだが、辯護士になる所存もなければ官吏になる考へもない。其頃の青年の氣を煽つた政論家となつて堂々天下の事を論じやうとする夢のやうな志望であつたが、生活問題に迫られて原稿稼ぎをする其の方面から當時の文壇を眺めると、當にこれ青年氣を吐くべきの天地で、傳統的なる舊文藝は頼れで、硯友社一派の新進作家は清新の氣を以て擡頭し來り、金港堂の「都の花」春陽堂の「新小説」等の小説専門の月刊雑誌の外に、紅葉山人の「色懺悔」、幸田露伴の「風流佛」を先頭として續々新著の刊行せらるゝ、「新著百種」あり、從來は政論雑誌には殆んど掲ぐる事のなかつた小説を「國民の友」が載するに至つて青年の文學熱は盛んなものであつた。

僕は一方政治運動としては友人に引張られて大井憲太郎君等の演説の前席に出たり、大隈伯の條約改正に對する反對運動の懇親會に出席したりしたが、又一方國木田獨歩氏等と共に「青年文藝會」の一員となり、既に故人となられた岩野泡鳴氏や、今既に基督教會の

牧師として立つて居られる赤司繁太郎氏等と共に「文壇」といふ雑誌を出したことがある。しかし、それらは少しも糊口のたしにはならぬので、僅かでも原稿料を呉れるのは佛教雑誌であつたから、自然佛教雑誌に筆を執ることが多く、其の因縁で、築地の積徳教校へ入るやうになつたので、其頃から政治運動の方は全く關係しなくなつたが、文學文面への未練はなか／＼断ち切れない。ソコで佛教雑誌へ小説を書くことを初めて其頃、伊達靈堅師に經營の移つた「佛教」、中西牛郎氏主幹の下に京都で發行せられた「經世博議」などに載せて貰つたことがある。特におかしいのは今は楚人冠といふて居られるが、其頃は専ら杉村縦横といはれた同氏が主幹して居らるゝ和歌山の新聞に、僕が續き物の小説を書いたことである。

しかし積徳教校に入つて十二圓といふ一定の月給を貰ひ、京都から祖母を迎へて二圓五十錢の家賃に住むやうになつては、自分一人の生活でなくなつたから責任が重く道樂半分に書いて居るといふわけにはいかぬから、自然原稿料の貰へる方へ向つて佛教雑誌への寄稿を多くせざるを得なくなつた。寄稿を多くせざれば、佛教の方面に就ても知る所が多くなければならぬ。幸に積徳教校の教頭として新に來られた姫宮大圓氏——鳥地大等氏の實父——は天台學の泰斗であるから、これに「天台四教儀」などを聞くことにして

井上圓了氏の「佛教活論」や吉谷覺氏の「明治佛教學綱要」等で獨りで勉強して居つた素人佛教が姫宮氏によつて稍々専門的に佛教を聴くことになつた。

ます／＼入つて、ます／＼面白くなるのは佛教であるばかりでなく、當時佛教界は人を求めて居つたのだ。世は尙ほ西洋崇拜の思想盛んにして、これを背景として基督教は非常な勢ひを以て佛教に迫り來り、當時の青年の眼は、日本傳統たる佛教を顧みるもの少く、佛教は全く老人の占有の如くに感ぜられて居たが、其の趨勢に一轉機を與へたのが歐米に於て基督教と軋轢衝突して來た哲學の輸入で、其の哲學は寧ろ佛教の教理に合致すべき點多きを主張した井上圓了氏等の獅子吼や中西牛郎氏の「宗教革命論」「組織佛教論」等は當時の佛教徒に取つては大なる援兵であつたが、各宗各派の高僧は専門學に没頭して世間の學問を知らず、これを表現する言語にも通ぜぬといふ狀況であつたから、多少生嚙りでも佛教を世間的に紹介する人を求めたので、僕等のやうな白面の書生も護法の居士として調法がらるゝに至つた。

其の結果、佛教で雑誌を出すといへば相談を受け、演說會を開くといへば、出席を求められ、給料以外の収入も少なくない。そこで家も表通りへ出て、家賃五圓といふ相當の構へとなつた。かうなると祖母は、早く妻を娶れと迫る、「いつまでも年寄に臺所のことまで

さして置くのか、さればとて若い下女を置くのは危険だから、何でも貰へと、僕が上京以來世話になつて居る岡本の叔母とも相談して、道樂でも初めては困るといふ心配もあつて、やかましく云はれたので、終に妻を娶るやうになつた。それが僕の二十二歳の時だから今から思へば頗る早婚であつた。

◇新 家 庭

此結婚にローマンスでもあれば、僕の歴史も花やかな一ページを持つに至るのだが、これが頗る平凡で、叔母の近所の娘さんを祖母と相談して貰へといふ。滿更、いやでもなかつたから貰ふことになつて、明治二十四年の秋に神田小川町の自宅で昔流の三々九度で結婚式を擧ぐることになつた。勿論媒人は叔母夫婦で、其時の料理代が一人前八十錢、主客十人の雜費を入れて十圓内外で済んだ。如何に物價の安い世の中でも、随分簡単な結婚料理だが、それでも鯛の焼物が付いて居つた。

其の翌日に披露といふほどでもないが、五六の友人を招いたが、其の時に來て呉れて今生き残つて居られるのは、後に讀賣新聞の社長となられた松山忠二郎君と早稻田大學に教授して居られる前田定次郎君と深川の木場に居らるゝ石原左曉君だけだ。而して此三人とも其後結婚してしかも妻君を先き立たれたが、僕の方は相變らず、其時の花嫁が今の婆さ

んとなつて生きて居る。

◇出版屋開業

家庭の方はこれで一段落、そこで大奮發して著述を公にしてやらうと、筆を執つて書き上げたのが、從來の神祕的な釋迦を全く人間的に取扱つた「大聖釋迦」で、アーノルドの「亞細亞の光」と「釋迦譜」位を材料としたので、さて出版するといふことになつて、到底本屋で引受けてはくれまいと考へ、これを發行するために、曾て京都青年會を造る折から知遇を得て居つた前の社寺局長其頃内大臣祕書官をして居られた櫻井能監氏に相談すると多少の補助はしてやつてもよいといふことで、護法書院といふ名の下に自費出版をやることにし、櫻井氏の題字と、其時初めて堀内靜宇氏の紹介で訪ねて行つた大内青巒先生に序文を貰ふことにして定價十五錢の小冊子は堂々と社會へ打つて出たのだ。

「大聖釋迦」は僕が教界へ打つて出た處女作であるが、これに味を占めて「佛教概論」を書いて製本が出来上つて神田の大賣捌所へ廻した晩に、明治二十四年の大火で大部分は烏有に歸し、本屋から金は取れず、印刷屋へは拂はねばならぬといふので頗る困難なる境遇に瀕し、或人の周旋で高利貸から一時の融通を頼んだのが失敗で、期限は來るが金は返せず利子に利子を生むので困つて居る。時も時、積徳教校は廢校となつて一定の収入の途は

絶え、終に小川町の家にも居ることが出来なくなつて三崎町の裏長屋に逼塞することゝなつた。

◇佛敎學校の先生

此三崎町時代は僕の最も苦んだ時で、新婚、間もなき妻の衣類は勿論、自分の著る物も典じ去つて、演説を頼まれても著て行く羽織もなく、友人のを借りては行つたものだ。其頃麻布の筈町に高等普通學校の後身たる曹洞宗中學校があつて、そこへ教育學や論理學をこれに哲學概論などを教へに行くことになつたが、丁度曹洞宗は兩山分離問題で騒いで居つて學校なぞのことに構ひつけず、僅かな計費でやつて居るのであるから一週二回五時間宛行つて月給五圓といふのだ。神田の三崎町から麻布の筈町までは二里に近い路程で、徒歩では二時間かゝるし、人力車に乗れば二十錢は取られるから往復四十錢、それでは残る所がないから大抵半分歩いて行つたものだが、雨が降つたり金がなかつたりすると休むの外はなかつた。

しかし僕の休んだのは、そればかりではない。實は學科が少し荷が重過ぎたので、其の下た調べに骨の折れることは夥しい。そこで調べが付かぬと休む、此休むことがなかく、多いが、先方も薄給だから仕方がないというて居られた。校長は陸鉞巖師、學監は樸太仙

師であつたが、後には忽滑谷快天師が慶應義塾を卒業して新に校長として赴任せられ、僕の月給も七圓に上つたが其の間に芝の淨土宗支校に教員の口があつて、これは十五圓の月給で矢張一週二回、英語と歴史地理を教へればよいといふので此方が道も近し學科も樂であつたから、曹洞宗の方は専門にそれらを研究せられた田中治六氏に譲ることゝして此方へ轉じた。

十五圓となつても、到底それで一家の生活は出来ない。其の上に借金の利子は累むといふ勢ひであるから、「佛敎文學」などといふ自費出版をやつて見たが、これも失敗で負債はかさむばかり、佛敎雜誌に寄稿する僅かな原稿料では小使にも足らず、其の中に子供は生れる。どうにも、かうにもならず、米の升買ひでも出来れば上等、甚しきは友人の家へ米を借りに行つたのは一再ではなかつた。其の使ひは大抵妻の役で時には祖母をすら勞した。

今、思ひ出しても涙を禁ずることの出来ないのは長男清熙が、生後僅かに四五ヶ月であるが、最早、笑顔をするやうになつて居つたのが腦膜炎で急死した時だ。金は一文もなし友人田中義成君の書物を借りて之れを典じて金壹圓を得、それで葬儀の準備をし、親戚や友人からの香奠で、形ばかりの送葬をしたことだ。

◇文筆生活

何とかして此苦境を脱却せねばならぬと奮發して書いたのが「日本佛教史」これは恐らく文化史的に日本佛教の變遷を書いた最初のものであつたであらうと想ふ。これは櫻井能監氏の紹介で吉川弘文館から發行したが、賣れ行き思はしからず定價二十錢の本で五百部の印税十圓を貰つた位、其の次に非常な骨折りで徹夜をつゞけて書き上げたのが作文の本「時文軌範」で、これを出版するため多くの本屋と交渉したが、何處も引受けてくれず、結局安いと思ひながら金十圓で神田の上田屋書店に賣つたが、これは再版三版を重ねた。これで僕の本も買手が付いて今度は益友社から「佛家文人傳」を出した。

かう著書に熱中すると自然學校の方がお留守になるし、著書の自由なのから考へると時間ではばられる學校の方はつらいので辭めたい／＼と思つて居つたが、それでは生活に差支へるので、何とか脱關の法を考へて居る時、明教新誌社へ入らんかと平松理英氏から勧誘を受けたので、これ幸ひと學校の方を辭めて隔日出勤で月給八圓であるが、好きなことが書けるといふので喜んで行くことゝなつた。

◇明教新誌時代

明教新誌は明治七年の發行で、佛教界唯一の新聞（隔日發行ではあるが）として教界に覇を唱へ、初めは大内青巒氏が自ら經營して居られたが、後には宏佛海氏を社長として内

藤湖南、後藤祐介氏等も編輯に携はつて居られ次で曹洞の村上泰音氏（後の栗山氏）主筆として居られたが兩山紛擾から曹洞宗以外の人といふので平松理英氏を主筆とし、僕が編輯主任といふことになつたが、平松氏は布教其他で不在勝のため僕と藤田祐眞氏とで主として之れに従事し、助手として臼井水城氏（今朝鮮義州で辯護士をして居られる）入社せられたが、其後幾もなくして平松氏は辭任せられて僕が代つて主筆となり月給は十九圓となり、臼井氏は辭めて司法省に入られ、安藤正純氏が入社せられた。安藤氏は十九歳、僕は二十四歳であつたから明教新誌は老人より全く青手の手に移つたのだ。

明教新誌の月給以外に多少雑誌の方の原稿料も入るし、其頃丹靈源氏の經營せられて居つた國母社で「普通學三千題」などを書いて原稿料も貰へたから京都にござる父母を迎へることにして、兎に角三崎町の裏長屋に落著いてもらふことにしたが、借金の方へは手が廻らぬので、金貸の方では少しは取れると思つて執達吏をよこしたのも其頃からであつたしかし意氣はソナナことでは衰へず、明教新誌上譯々の論、大に教界の廓清を促したものだ。

たゞ困つたことは明教新誌は各宗本山の機關のやうなもので、特に社主の關係から、曹洞宗とは特別の關係があつたから、これに觸れるとお目玉を食ふので、當らずさわらずに

やつて居る。それが新進青年佛徒からは煮え切らぬので、其頃組織せられた境野黄洋、高島米峰、杉村楚人冠、古川老川氏等の新佛教徒からは大に攻撃せられた。しかし僕等は自ら中正穩健と信じてこれと應戦し、安藤氏の外に白山謙致、今井靄山氏等も一時は居られたが、新佛教對戰の時代には横井雪庵氏が居られ、これに本多五陵氏、後の川面凡兒、當時蓮華法印の名を以て寄稿せられた蓮池恒次氏等が集つて文友會なるものを組織し、雨中篋を著て目黒へ筍食ひになぞ行つたものだ。

此間に僕の著書として纏つたものは「四個格言」で、これは當時各宗協會で佛敎各宗の綱要を發行する中へ、日蓮宗は念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊の四個格言を入れやうといふのを、それだけは除けといふことから大問題となつたので、それを取扱つたので、神田の東華堂からの需めに應じて書いたものであるが、其の原稿料が七十圓といふので、これで一息ついた。

一息ついたといへば、友人の石川照勤氏が成田山新勝寺の住職になられた時だ。氏は望洋學人又は直得子の名で僕等と共に一文五十錢か一圓の原稿料を稼いで居られたので、時々僕の陋屋へ來て牛鍋をつゝいて大に議論を闘はしたこともあるのが、一躍して成田山の御前様となられて、僕の窮乏を察して記念品代として金百圓を送られたことだ。これによ

つて久しくまつはつて居つた執達吏の手を免れ、家財を封印より脱せしめた。

かくする中にも、月日は流れて明治も早や三十年を迎へることゝなつた。此年に明敎社主宏虎童氏（佛海氏の養嗣子）は曹洞宗當局と喧嘩して、明敎新誌として其の筆鋒を一變せしめんとした。如何に社主の都合とはいへ、昨日までの筆を改めて心にもないことを書くことは僕には出來ないからというて斷然其の主筆を辭して客員として助けることゝし、從來此方面には無關係であつた安藤正純氏を主筆に推すことにした。これを聞いて曹洞宗の方では非常に氣の毒がつて新に發行する曹洞宗報の編輯を囑せらるゝことゝなつて、僕は主筆、水野靈牛氏が補助といふことで、これに入ると共に國母社の方をも従前よりは多く助くることゝなり、高田道見師の「通俗佛敎新聞」にも寄稿することゝなつた。

◇筆舌傳道

其頃から佛敎界に行はれ出したのは文書傳道で、從來とても印施といふことはあつたがそれが盛んではなかつた。こゝに眼をつけて大内青巒氏や高田道見師のものを廉價で頒布を企てたのは丹靈源氏の國母社で一時はなか／＼盛んなもので高田道見師の通俗佛敎新聞も此社から出て居つたのであるが、それが分離してからは専ら大内青巒先生のものを出して居つたが、大内氏は初めは自ら經營せられ、後には其の手代たりし今村金次郎氏に譲ら

れた鴻盟社があるので國母社のいふことばかりをきいて居られないといふので、社運はやや降り坂となつた。僕が此國母社から出したもので最もよく賣れたのは「内地雜居に對する心得」で、大内青巒先生はこれに題して

われもまたかくこそ思へ口つきも

筆のすさびもさながらにして

と、爾來、僕のもは先生に似て居るといはるゝやうになつた。

演説の方は東京では天台宗の顯揚會、淨土宗の芝岳會、曹洞宗の腦裂會がしばしば開かれて借り羽織や借り袴で、よく出席し近い所では横濱佛教講話會、これは釋宗演師、大内青巒居士、に同席したのが初めて明治二十四年から引續き今も年に五六回は缺かさずに出席して居るのが一番古いが、泊り掛けで出たのは明治二十五年の秋、千葉縣の東金へ行つたのが初めて、當時汽車はなかつたから、兩國から乗合馬車で千葉へ出て、こゝに一泊して翌日人力車で東金まで五里といふので三日間の講演に金八圓の謝儀を貰つて、歸りは拂曉に出發して夜半に宅に著いた。其時の發起人が野口義全氏（後の日主上人）だから面白い。顯揚會ではしばしば奥田貫昭僧正のお伴をして茨城、群馬等の近縣へ出かけた。其中でも面白かつたのは筑波山麓椎尾の樂王院へ行つた時、下館の宿屋で晝飯を供せられた

が、昆布巻の中に鮒が入つて居つたからというて、隨行の僧侶達が騒ぐと、僧正が「どうして鮒とわかつた」といはれたので大笑ひとなつた。此騒いだ連中の中に今は一宗の重鎮となつて居られる方々もある。明教社に入つてからは地方講演の依頼も多く、何分、日が多く費されぬので近縣だけであつたが、明教の方が客員に廻つてからは自由に遠くへ出かけられるやうになつた。

上宮教會の出來たのは、矢張此年三十年の四月十一日で、大内青巒、河瀬秀治、島田蕃根、桑田衡平の四氏が發起人で、僕は補講といふ資格で其の會を助けることとなり「御國の光」といふ雜誌を出し専ら其の編輯を擔當し、且つ演說會場の世話等は僕の役目で、宣傳の張り紙等は大内先生自ら書かれたほどで在家佛教興隆の大旗幟を擧げてはじめられたのである。此上宮教會の仕事を助けるには河瀬氏の近所に居つた方がよいといふ要求と、神田の家が如何にも狭いのに祖母、父、母、僕等夫婦に子供が二人も出來ては到底住みきれないので、一時錦町に轉じたが、それは僅かに一二ヶ月で、芝の愛宕下の煉瓦造りの家に轉ずることゝなつた。こゝは二階もあり、庭も廣い。其の代り家賃も高かく三崎町の家

◇高利借り生活

の三倍でこれからまた苦難時代の現出だ。

僕は二十二歳で結婚し、二十四歳で早や父となつて居る。此の早婚が僕を禍して痛切に生活難を味つたのであるが、考へて見れば之れ禍のみではない。其の爲めに僕は青春の時代に何人も一度は陥る遊蕩の累を免れ、女の關係で身を過ることのなかつたのは此の爲めであつたかも知れない。

政治に志し、文藝に志し、皆な成らずして佛敎に走つた僕の轉變は、僕をして青雲の志を失はしめたに相違ないが、それが僕を禍したか、どうか、僕が若し宗教といふものに何の關心も持たなかつたら生活難と奮闘して居る間奇矯なる社會主義的思想に陥つたかも知れない。事實、僕は富豪を呪ひ、金貸を咀ふに於て深酷な思想をさへ有して居つたのである。

僕等は社會の爲めに働いて居つて金に窮するのだ。金のある人が貸すのは當然で、これに返す代りに社會にそれだけのことをすればよいので、何も貸した個人に返すに及ばぬ。個人に借りて社會に返すなどいふ議論も書いたことさへあるのだ。

其頃、僕等の借りて居つた高利貸は、百圓の金を借りようと思へば、連帶者二名を要し一割の手數料と、三ヶ月の利子、この利子が普通五兩一分といはるので、五圓につき月二十五錢だから百圓で五圓、三ヶ月で十五圓、それを引いて貸すのだから實際入手するの

は七十五圓、それが三ヶ月目に躍りと稱して返した月の利子は天引してあつて、それが又借りた月となるんだから二倍の利子を拂ふことになつて一ケ年には百圓——其實七十五圓しか借りて居らぬものに對して利子として取らるゝものが八十五圓、それに手數料の十圓をも加へると九十五圓拂つて依然として百圓の債務は残るといふのだから、なか／＼返し切れない。ソナナ高いのを借りなければよいといふかも知れないが、目前の急にあとのことなど考へて居れないから已むを得ず借る。借りた以上は債務は友人の連帶者に及ぶといふのだから、弱身につけ込み公々然と金を取る。強盜だとして、高利貸強盜論を書いたことがある。

しかしながら、最初に借りたのが、悪いのだと觀念して、執達吏をむけられ、差押をせられ、いろ／＼侮辱を受けたが、どうか、かうか返済して、後には信用を高利貸に得て「先生が印形して下されば何程でも貸します」とまでいはしむるに至つたのは佛敎家であるといふ自覺が、僕の心を修めさせたので、僕には此心がなかつたら、どんな亂暴をやつたかも知れない。

高利貸に受けた此信用は、自分の方は片が付いたが、五人の連帶に印を捺したので累して、斷えず、困められたが、持つべきものは友人で、これはまた他の友人の周旋で其の桎梏

を脱するを得た。これは明治三十年前後のこと、其頃の借金友達が今は立派な紳士になつて居られるから、名前だけは遠慮して置くが、互に印を捺したり、捺されたりして随分難を共にしたものだ。

◇全國行脚の志

明治三十二年から内地雜居が實施せらるゝといふので、佛教徒は大に震駭したものだ。これより先き佐々友房君の主張によつて帝國黨なるものが出来、其の綱領の中には國家社會主義を採用せなければならぬといふことが明言してあり、其黨の別働隊として佛教徒を動かさうといふので、政治俱樂部なるものを組織するといふことになつたから、此際、此時、斷じて袖手すべきにあらずと、僕は佐々友房君に面會し、其の援助の下に大に働かうと覺悟して、五十嵐光龍君、安藤正純君、揖東正彦君、堀内靜宇君といふ連中と大演說會を開き、更に僕自身は全國に遊説して國民の覺醒を促さうと、明教新誌に廣告して行脚の途に上つた。

初め京都に入つて有志家と相談し、和田大圓師、段證依秀、河合正鑑といふ錚々たる連中と京都、大阪で演說し、僕は有志に招かれて讃岐に赴いたが、此有志といふのが土地に信用のない人で、僅かに持て居る金は運動費に取られ、宿泊費にも窮する状態となつた。

幸に佛教の講演を望むるものが續々あつたので其の謝儀や二三有志の應援で宿賃を拂ひ、一ト先づ歸宅して、先きの有志との關係を絶ち再び出直すことにした。

此出直す時に、一人では心細いから安藤嶺丸君を誘つた。同君は青森の師團の軍隊布教中として赴任せられて居つたが、丁度其頃止めて歸られたから、早速同意せられて、これよりぞ旅のあはれを知る。明治三十年の秋、二人で東海道を西下し、神戸から船に乗つて高松に渡り、高野山別院で三日間講演、終つて多度津から備中玉島へ出て二日間講演をやつたが、安藤君はモウ歸るといひ出したから仕方なく、こゝで袂を分つて、獨り西に向ひ先き／＼の有志と連絡をとつて、笠岡、福山、尾ノ道、府中、廣島等の中國から九州に渡り、佐賀縣下を一ヶ月ほど巡講唐津を打止めとして歸つたのが、僕が生れて初めての大陸行。

翌年の二月、雪中、越後の糸魚川、能生名立の地に赴き、四月、岩手、秋田の二縣を一ヶ月以上を費して廻り、此時は中田直芳君が同行せられ、同八月、これ又島根縣下出雲の國だけ一ヶ月以上、同十一月長野縣北信地方を藤本全機君の紹介で歩いた。これが僕が各地方に因縁を持つ初めで、爾來全國殆んど到らざる所なきに至つた。

◇筍ぐらし

○此旅行中にも明教新誌の方は客員として關係して居つたが、主筆は安藤正純君より干河岸貫一君、それから一轉して梅原薫山君となつて、安藤君は僕と共に客員であつた。此時明教新誌を株式會社とし日刊にするといふ企が起つて株券募集のため僕と安藤君とが京都に赴き、各宗本山を勧誘することになつた。ソコデ早速二人は運動費を貰つて京都へ出かけて各宗本山を歴訪し、大分賛成を得て、頗る有望となつた時、社主はそれを機會に、「やまと新聞」に合併して日刊を實現するといふことをいひ出した。僕等は明教新誌のため運動して居るのだ。これが「やまと」になるのなら奔走する必要はないと、既に申込れた所を一々斷つて二人は憤然として京都から歸つた。

憤然として歸つたのはいゝが、年末だといふに僕も安藤君も一文なし、京都へ運動に行く時に新調した外套、羽織、袴さては著物と次ぎ／＼と脱いで典じ／＼だからこれを一枚宛皮をむく筈ぐらしと笑つたものだ。

◇社會運動に傾く

明教新誌は瓦解したから、僕と安藤正純君とで「政教時論」や「社會評論」といふ雑誌を出して見たが、これは所謂三號雜誌で潰れてしまふたが、此頃、僕等をして起たしめたのは足尾銅山鑛毒事件で、今から思へば田中正造翁などに煽動せられた結果もあらうが、

僕等は内村鑑三、木下尙江、巖本善次等諸氏と共に在京學生八百名を引き連れて鑛毒地視察に出かけ、渡良瀬川沿岸の被害を見て、悲憤措く能はず、大八車を組み立てた上に立つて學生諸君に對して演説を試みたことがある。これが縁となつて此運動は佛耶教徒提携してやるべしといふので、島田三郎、巖本善治の二君と共に佐野、足利等の各地に遊説して足尾銅山の攻撃を試み、東京にあつては木下尙江君や、西川光二郎君と共に此種の演説をやつてしば／＼警察官の中止を受け、更に満都學生の運動として之れを煽つたので、當時僕等と一處に演説をやつた人々の中には今日立派な政治家になつて居る人もある。

これは政府の壓迫や學校の取締りで次第に其勢ひを殺ぎ、且つ鑛山の方でもいろ／＼鑛毒防止の計畫を立てたから、次第に忘れられてしまうことゝなつたが、僕に若し佛教への反省がなかつたら社會運動に突進したかも知れないが、佛教への反省は僕をして詭激に赴くのを止めた。

佛教演説といふものは、頼まれるまゝに出て行けば幾許でもあるもので、次ぎから次ぎへと廻されるから、其の需めにのみ應じて居つては、少しも勉強が出来ない。これは一番考へねばならぬと思ふが、出て行かなければ収入がない。ソコデ一舉兩得のことを考へて、たゞ旅から旅を飛んで歩るいて居てはツマラヌ。これは一つ旅行中に材料を得て、他

人の未だ手をつけない研究をしてやろうと、ポツ／＼集め出して、當時森江本店に居られた森江英二君に相談し一枚二十錢の原稿料で、書いただけづゝ貰ふ約束をして書き出したのが「日本宗教風俗志」で、挿畫は僕の従弟で少し繪心のある庸次君に書かすことにし、十枚書き二十枚書き、一年ほどかゝつて明治三十五年二月に出来上つて世に公にすることになった。これは全国各地の宗教風俗を蒐集したもので、當時には珍らしかつたから非常に好評を博し、これまで僕を目してたゞの演説使ひのやうに思うて居つた人々をして僕を見る眼を一轉せしめたほどである。

◇先輩友人の助力

明治三十五年十二月七日、大恩ある祖母を喪ふた。祖母は名は格なま、松平但馬の長女嫁して我家に來られてより五十餘年、七十を以て逝かれた。随分苦勞ばかりさして何一つ安心をさせなかつたと思ふと、暗涙の襟を沾すを禁ぜなかつた。せめて其の葬儀にはと、小雨降る寒き日であつたが芝の西久保の宅から青山葬場まで徒歩で送葬して弔意を痛切にしたが、その夜から悪寒を感じて四十度近き熱に侵され、早速醫師の診斯を受けると、急性肺炎、手遅れはしてならぬと、直に赤十字病院へと送られ、こゝに生れて初めて病院の人となつた。

年末に近し、送葬其他費用のかさむ上に入院となつては金の算段も出来ず、どうなることかと思へど、身は重患で如何ともし難し、此時大内青蠻、河瀬秀治の二先輩並に高田道兄、峰玄光、安藤嶺丸等の諸友が中心となつて療養費を集めて「金のことは心配せず、心しづかに療養せよ」と家計のことから病院のこと、さては病後の静養の金をも調達してくれられた厚情は今に感謝措く能はざる所である。

やうやく退院は出来ても、病後はしばらく暖地に静養せよと、衰弱の此身を安藤嶺丸君が友人總代として熱海温泉まで看護して送りつけられ、こゝに三十五年を送り、三十六年の一月半まで滞在して心身を休めた。讀書も作文も醫師から禁ぜられて居るので、毎日の所在なさに宿屋の犬と心安くなり、犬をつれて春淺き梅林へ散歩するのを日課として日を送つた。

生れて兄弟のなかつた僕は、子供の時から犬が好きで、何處でも犬とは心安くなり、僕の家には犬のおらなかつたことはないの、此犬のためには随分他人に迷惑もかけたが、自分も迷惑したことは少なくないが、それでも何となく、これが居らぬと寂しく、今でも二匹ばかり居る。

◇著者と出版業者

明治三十六年に芝から神田へ轉居した。其年も押し迫つた十二月廿八日、突然或人の紹介で山中孝之助といふ人が來られ「私は一つ出版をやつて見たいと思ふんですが、資金は三十圓しかないが、印刷や廣告屋は後金でよいただけの信用はあるから、先生、どうか助けて思つて、そこで死生觀といふ本を書いてくれませんか、それで一旗擧げやうと思ひます」との交渉「面白い一月中頃までに書いて見ませう」と約束して筆を執り、書くに従つて印刷して出來上つたのが、三十七年二月、日露の風雲急に、やがて宣戰となつて來たから、飛ぶやうに賣れて重版又重版、急ち二十幾版といふことになつて、山中君は景氣づいて、原稿料は、モット出しますからと其年の中に運命觀女性觀と矢繼早やに發行して、山中井列堂といふ書肆が本屋仲間で頭角を現はすに至つた。

此山中孝之助君は好人物で、父祖の代まで和泉屋市兵衛、俗に泉市といふ江戸の大書肆であつたが、其後失敗して自分は書籍會社の店員をやつて居られたが、それでも江戸子肌の義侠は、今日救世軍に於て誰れ知らぬものなき山室軍平氏がまだ印刷屋の小僧をして居られた時代に、學資を送つて其の學を助けたといふ美談をも持つて居られるので、最初、僕が僅か三十圓で書いたといふことを非常に徳として、自分の成功と共に僕の生活も助けやうといふので、爾來は印税といふことにしようと思ひ出し「英雄史」「應用修辭學」

「佛教要義」等續々同君の店から出版して、それ相應に賣れたものだ。

明治の末から大正の初めへかけては、著述に忙殺せられた時代である。山中孝之助君の出版事業が着々進歩し、僕の本が比較的賣れるものだから、他の書肆からも出版を促し來れた中に、知人の紹介で、こは素人から出版界に乗り出し茅原華山君の「動中靜觀」を出して大に當てた東亞堂主人伊藤芳次郎君、僕に「冥想論」を書かして、表紙に穴を穿ちてソラクテースの顔を出すといふ奇想天外の表装で之れを賣り出し、これが又相應に賣れたもんだから、引續いて「人格の養成」「朝思暮想」更に大きなもので「修養論」「運命論」「世態人情論」「讀書法」「文字禪」「禪學觀」と矢つぎ早やに出して、ブックメーカーと罵らるゝに至つた。

◇著述が勉強

僕等のやうな素養のないものは、書を著はすといふことは自分の學問で、其の爲めにいろ／＼な書物を読む。毎にあれもこれもと涉獵したいが、さて困るのは語學の素養だ。幸ひ英佛獨の三國語に通ずる大住嘯風君が遊んで居られたから、君を招いて獨逸語を學ぶと共に英書の輪讀をもして貰ふことにした。

かうして學びつゝ書き、書きつゝ學ぶ、此大住君年少氣鋭、才氣煥發、僕の先生でもあ

り、編輯の助手でもあり、演説の前席でもあり、遊び仲間でもあり、相談相手でもあり、兄弟よりも親しく日夕往來して僕の仕事は悉く手傳つて貰ふこともあり、僕と境野黄洋君とが常任講師であつた上宮教會へは主事として参加し、僕等の運動せる新佛教同志會にも入り來り、僕の關係する出版業者には皆な紹介し、僕の出張する講演の代りには行つて貰ふといふ風であつた。

此大住君の助力を頼みに山中孝之助君の求めに應じて述作にかゝたのが「大死生觀」で西洋方面の材料は専ら大住君が集めることとし、其資料によつて孜々として書きかゝり兩人頗る勢ひの加はつた時、俄然として山中孝之助君が死んだ。嗚呼、萬事休す。さあ何うしようかとなつたが、兎に角遺志を繼いで稿をつゞけ、追善出版として遺族や大阪の積文社の助力で出版することとし、後に東亞に轉じ、今は丙午出版社に移つて「死生問題」として残つて居るのが此本だ。

此間にも僕は地方講演は依然として出張を辭することが出來ないので、佛教會より漸次教育會の方面へと乗り出して旅から旅へと廻つた。

◇時代の變轉

僕が「社會教育」といふ小冊子を出したのは明治四十三年で、其頃文部省では社會とい

ふ名を忌み嫌ふて通俗教育といひ、其のために委員を設けたり、講習會を開いたりした。其の講習會に出たのが僕が文部省主催の會に出た初りで、其講習を更に詳しくといふことで東京府教育會の主催でやつたのが今以て残つて居る「通俗講話の理論並に方法」といふ一冊子だ。内務省方面から頼まれたのは當時の地方局長であつた井上友一博士の依頼で徳島縣名東郡に往つたのでこれは大正二年であつたと思ふ。

其頃僕は眞溪涙骨兄に頼まれて京都の「中外日報」の主筆として東京から論説を送ることになつて居つたが、同志の人が居らなくては不便であるので、大住嘯風君を京都に在住して貰ふこととし、君は社にあつて麗筆を振はれ、僕は遠くこれを應援するといふ状況であつた。此中外日報の主催で、京都に講習會を開いた時に三宅雪嶺、谷本富の二博士も出られ、それに僕も参加して谷本氏が咄堂咄辯にあらず、雄次郎雄辯にあらずと洒落られて、三宅博士から富といふも金持にあらずと野次られた有名な話が遺つて居るのだ。

中外日報の主筆は二年程で辭して「新修養」といふ月刊雑誌を百目木劍虹君と共に發行して、これは大正十二年の大震災まで續けた。此雜誌に連載したもので評判のよかつた「茶根譚講話」は別冊として明誠館から發行した。

明治の末から大正の初めは修養書全盛の時代で、僕の書物の最も賣れたのも此時代いろ

く、な出版屋がつてを求めて原稿の依頼に来るし、貧乏書生が名前を貸してくれなどと強請し來るといふ状態で、それらは皆な斷つたが、前金を置いて歸つて行く本屋さんには困り抜いて、至誠堂から「人の心」「旅から旅」「修養小品」實業の日本社から「徹底論」「民衆と宣傳」大倉書店から「國民の精神的基礎」などを出したが、其の間に時代は變轉して修養を口にするものは少なくなると共に、僕の書物も賣れなくなる。僕がたゞ賣る爲めの原稿稼ぎなら此時代の推移に應同して時好に投ずる述作に局面轉換をやつてもよかつたのだが、瘠せても枯れても社會教育を標榜して居つては、ソナナことも出來ず、依然孤壘を死守して時勢を憤慨するの外はなかつた。

僕が「死生觀」や「冥想論」を出した明治三十八、九年から大正の初めに至る間に、僕の文體も一變せざるを得ざるに至つた。初めは漢文崩しの其れ然り豈に然らんや流で文字に含蓄を多くして喜ばれたものが、次第に文語體はすたれて、大正に入つても文語體は脱しないながらも、口語體を中心としなければ、全く讀まれないやうになつて、いつとはなしに時代に動かされたのである。

◇一眼を失ふ

講演の方は佛教方面は勿論教育會、青年會と手が延びて、席、煖かなるに違なく、夏季

の如きは奔命に疲かれ、四十四年の夏には秋田よりの歸途、病を得て重態を傳へられ、月餘を病牀に送り、大正二年の夏には琵琶湖畔にマラリヤに侵されて途中より歸つたりしたが、それでも頑健、筆と舌との生活を續けた。

これより先き明治四十四年の春、神田の矯居より今の代々木の宅に移つたので、草茫々たる明き地を借り受け、東亞堂の伊東君や、上宮教會の河瀬秀治先生の盡力で新築した村莊で、庭園の樹木は友人からの寄附、建築費は借金。

著書の大部分は此處で書いたので、幾春秋を送る中に、僕の視力が、どうも悪い。少し變だと思つて醫師に見て貰ふと左眼は既に失明して居る。どうにかして治らぬかと長い間名醫と云ふ名醫を訪れたが、結局右眼だけを取りとめる位で、一眼は何ともならぬ。仕方がない。二つあるのは贅澤、片方で結構といふものゝ、これが近眼三度と來て居るから、盲者の方へ餘程近い。そればかりでなく、いつ右眼に及び來るかも知れぬとおどかされて一眼でも見える中に、大著述をやつて置かうと。友人の田村文太郎君の出資を頼み、百目木君が出版方面を引受けることになつて、やり出したのが「日本風俗志」

大正五年の末から起稿して同七年六月に脱稿した上、中、下三卷。其間に世間に世界戦亂の餘波を受けて紙價は暴騰し、豫約出版の本書は大打撃を受けて、賣れることは賣れた

が、收支償はざる素人の商賣に終つたが兎に角、眼のある中にと考へて一應完成してしまつたので、僕の著述の中では尤も苦心したので、挿畫こそ畫家の厄介になつたれ、筆寫から校正まで他手をからず不自由な眼でやりとげたのだ。

◇官民協力

大正七年の十二には恩師大内青巒先生を喪ひ、其頃病臥中にあつた父は越えて翌八年の一月十五に終に黄泉の客となり、僕の齡五十一、父を喪ふて人生の前途、一轉機を致すべき同月二十六日、松村介石君の誘ひにて床次竹二郎氏の内務大臣官邸に招かれ、世界大戰の思想的影響に對して各自意見を交換し、此の國民に自覺ある協力を促すの必要は官民結合の精神運動を起すの外なしと、爾來數次の會合、略ぼ意見の一致を見、終に民力涵養の運動となつて民間より僕竝に松村氏、福本日南氏、本多日生氏、少し遅れて高島平三郎氏等の参加となつて全國的宣傳を試みることとなつた。

官僚に降伏したとか、政友會の手先となつたとか、さまざまの批難はあつたが、僕は僕の從來の主張が容れられたから其の主張を全國民に徹底せしめんとするので、大臣の意見がどうあらうと、政友會が何といはうと、ソナナことは顧る所でなく、僕は僕の自由に其の意見を吐露した。講演の謝議や旅費は貰つたが、其の爲めに年俸も、月給も貰つてやつ

たのでない。たゞ民間の一人として参加したに過ぎないことを明にして置く。

しかしこれが機縁となつて官民協力の教化運動には毎に参加することとなつて、大正十二年の精神作興の詔書渙發に感奮して起つた教化團體聯合會の創立發起の一人となり、現在の財團法人中央教化團體聯合會の理事の末席を汚して居る。

◇チヨット金持

僕が少年時代は明治維新後の西洋崇拜旺盛の時代で、誰れでも彼でも洋行さへすれば偉くなれると思ひ、洋行歸りといへばトテモ持て囃されたもので、一度は洋行して見たいとの野心もなかつたではないが、ソナナ費用の出る道もなく生涯到底外國の土は踏めぬと諦めて居つたが大正十一年に突然亞米利加の有志特に本派本願寺の各教會や日本人會の發起で旅費を送るから来てくれとの交渉、此機逸すべからずと直に應諾して知人に計り、其頃排日の氣運の持ち上がつて居る時、在米日本人に對して如何に講演すべきかと知人に計りつゝあると、澁澤榮一男はこれを聞いて、爲めに送別の會を催して姉崎博士、添田壽平氏、頭本元貞氏等米國通の人々を紹介して多くの教を得て、同年秋春洋丸に搭じて太平洋を浮び、生涯かゝるあるべしとも豫想せざりし洋行の客となり、北は英領カナダより南はメキシコ國境に至るまで百有餘回の講演、さすがは亞米利加は黄金の國で僕の時計が貧弱だか

らとて二百弗と正札付きの金時計を呉れた人もあり、一席の講演に感激して五百弗を贈られた人もあつて、収入少からぬが、此足で序に歐羅巴へとのしてしまえば戦後の状況を見られたのであらうが、さうく家もあけられず、翌十二年の二月には早くも歸朝したが、今にして思へばあの時一奮發して置たら歐羅巴へも行かれたものを、其後昭和三年にも二、三招かれたが此時は二月の豫定で布哇各島のみで歸つたから、モウ生涯歐羅巴へ行く機會は逸してしまつた。コンナ事にも機會の逸却はある。

僕の亞米利加に得たる収入は僕をして生涯初めて借金を清算せしめて、ホツト息をついたが、それも束の間、其後、間もなき關東大震災に、幸に火災は免れたが、家屋の大修繕に建築ほどの金を要し、其後時勢に憤慨して國民思想著書十二卷へ自費出版なぞ思ひ立つて事業は蹉跎し借金はかさみ、矢張もとの木阿彌、どうしても貧乏は我が身を離れぬと見える。

◇聖恩、微臣に及ぶ

生涯に全く豫想せなかつたことは大正十三年一月二十八日、皇太子殿下(今の聖上陛下)御成婚の佳辰に際し、宮内省より社會教育功勞者として御紋章入銀杯并に金壹封を下賜せられたことで、微臣の微力、天聽に達し、此恩賜にあづかる。感激の情、禁じ難く、更に豫

想せざりしは昭和三年御即位の御大禮に際し宮中賜餐の光榮に浴したことで、其の後觀菊の御宴に召さるゝこと一回、觀櫻の御宴に召さるゝこと二回、觀菊觀櫻には愚妻までお召しを戴くのであるから、老妻も亦其の豫想外なる聖恩に感泣したので、一生を通じての幸福としてこゝに特筆する。

◇依然たる老書生

嗚呼、「六十一年の我」これを書いてからも早や七星霜、依然としての筆舌生活、我が身を離れぬものは貧乏神、他に向つて開運の策を説きながら自分の借金はまだ拭ひきれず、これから先き何年生きるか恐らく借金も付き纏ふであらう。人事轉變、平凡人の平凡生活過去を追懐して徒らに涙多く、將來を望まんとして餘生幾許もなし、此幾許もなき人生にせめては聖恩の萬分の一にでも報じ奉るべく益々微力を盡くすの外はない。しかし、それが筆舌以外に何の能もないのだから、我が運命も少し心細からざるを得ない。(畢)

◇ 著堂咄藤加の行發社本 ◇

放送菜根譚講話	定價一圓三〇錢
全釋菜根譚	定價一圓六〇錢
佛教とは何ぞや	定價一圓
死後はどうなる	定價一圓二〇錢
降魔表講話	定價一圓二〇錢
勝鬘經を語る	定價一圓五〇錢
維摩經の文學	定價六〇錢
	送料四錢

昭和十一年十一月二十八日印刷
昭和十一年十一月三十日發行

「運命の解剖」

〔定價壹圓參拾錢〕

著者 加藤咄堂

發行者 岩野眞雄

東京市芝區芝公園七號地十番

印刷所 日進舎

東京市芝區芝浦二ノ三

製本所 兩角製本所

東京市芝區新橋五ノ二四

東京市芝區芝公園七號地十番

發行所 大東出版社

振替東京一九四七一番

電話芝(43)三九四〇番

倉田百三著 最新刊

四六判四百五十頁挿繪廿數葉入美本
一圓五十錢・送料十二錢

信仰讀本

親鸞聖人

著者曰く…親鸞の信仰の眞髓をよ
く浮彫りに現すた
め、生涯を一の物
語として編んだ。
讀易い美しく深き
内容と、ゆたかな
文飾をもつて聖人
の性格と信仰との
精髓をとらへた事
と信ずる。

まことの信を求め悦ぶ人へ

「出家とその弟子」に示された深刻な内觀を更に深め、しみじみ讀者の必に沁み入る麗筆を以て新に書き下されたる傑作。國寶御傳鈔中の廿數畫をその文に對應せしめて錦上更に花を添ふ。即時愛讀をすむ。

信仰讀本

蓮沼文範著

新刊 四六判三六〇頁
一圓五十錢 送料三錢

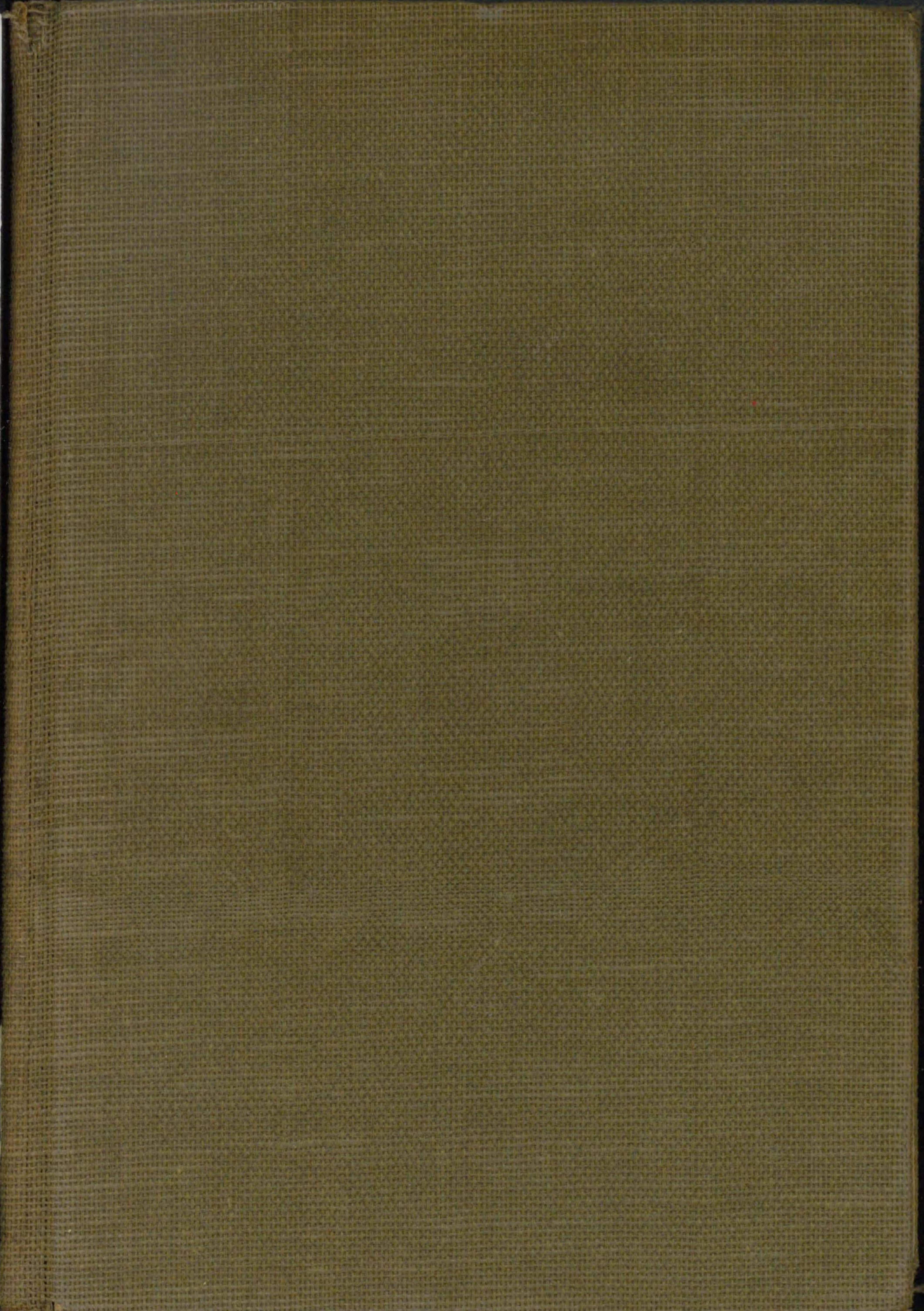
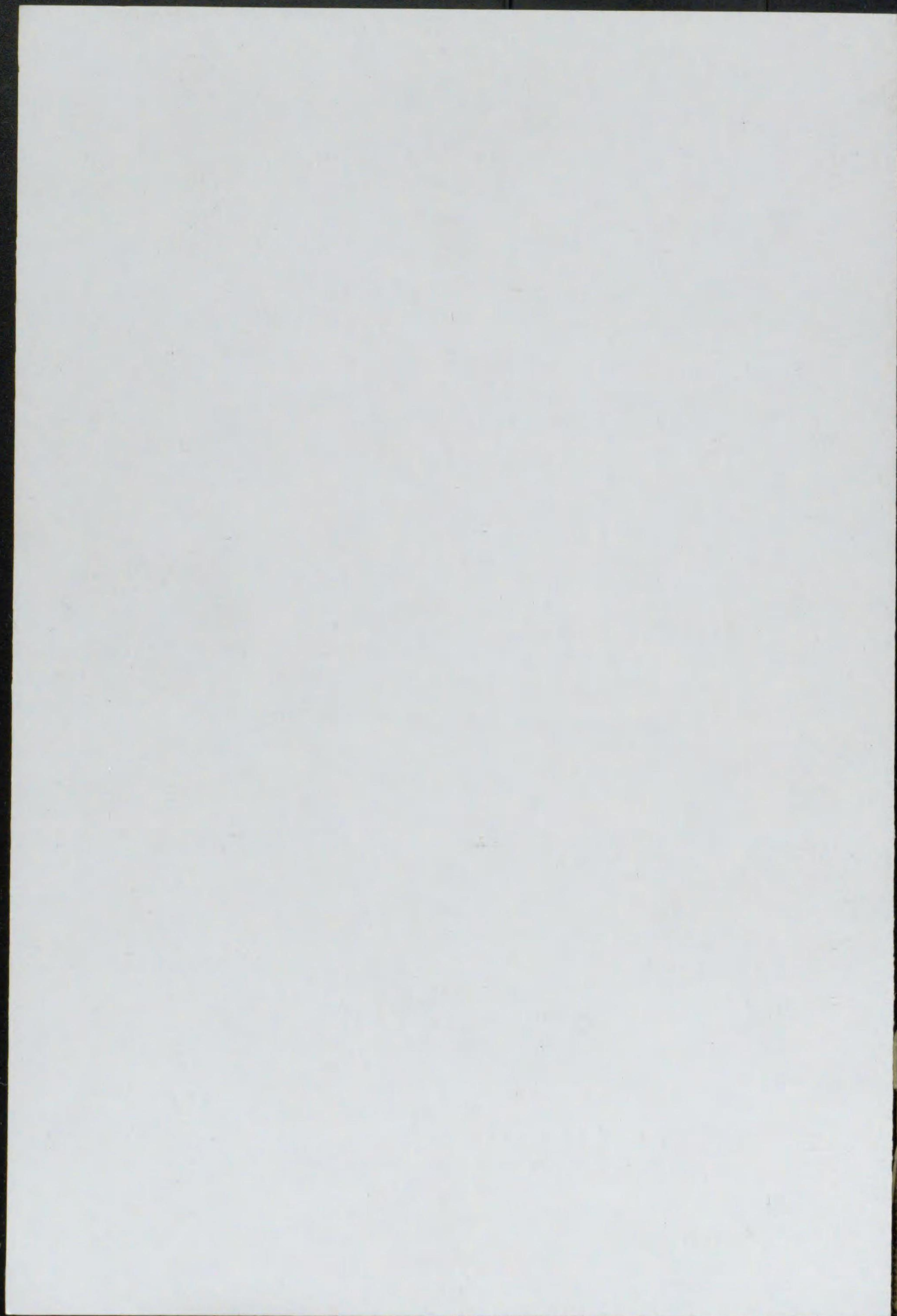
西行と一茶

一著は一著毎に文名を高めつ、ある新人の快作！

家を出た西行と家に歸つた一茶。その歌聖、俳聖として、生涯と、その作品を一篇の物語りとして綴る。喧騒の生活裡に閑寂の味ひ、有限の人生に無限の命を體得するものはこれ。

發行所 東京芝区芝公園七ノ一〇 大東出版社
東京芝区芝公園七ノ一〇 電話三九四一 芝公園七ノ一〇 電話四四九四

696
166

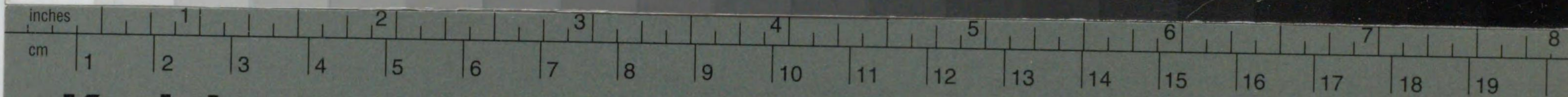


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

